北海道南部のアイヌ語

アンナ・ブガエワ（児島康宏、長崎郁 訳）

1　はじめに

1.1　アイヌ語の系統、類型、方言

アイヌ語の系統は不明。アイヌ語は膠着的、複統合的、抱合的な特徴を示す。文の構成素の順番は SOV で、混合型（ただし基本的には三立型）の文法関係標示を持つ。もっぱら主要部標示型で、接尾辞よりも接頭辞をよく用いる。

アイヌは、伝統的に狩猟・採集を生業としてきた人々であり、かつては北海道以外の地域にも暮らしていた。本州の広い地域には 18 世紀半ばまで、千島列島には 20 世紀はじめまで、樺太南部には 20 世紀までアイヌの人々が暮らしていたほか、カムチャツカ半島南部にも暮らしていたと推定される。地理的な観点から、大まかに北海道、樺太、千島列島で話されていた 3 つの方言が区別される。今日、樺太と千島列島はロシア連邦の一部であり、北海道南部にのみわずかな数の母語話者がいる。

樺太方言と北海道方言とは異なり、千島方言についての資料は、Torii（1903）の記録した語彙目録などのわずかな資料をのぞき、ほぼ存在しない。樺太方言は大きく東岸と西岸の方言に分類される。北海道方言は北西部の方言と南西部の方言に大別され、それぞれがさらに地域ごとの方言に細別される（服部（1964: 18）、Asai（1974）を参照）。樺太北東部で話されていたタライカ方言は、他の樺太の方言とは異なり、北海道南部の方言と共通の特徴を持つ。村崎（2009: 1）によれば、樺太方言と北海道方言の話者は相互に理解できない。また、服部（1964: 19）によれば、平取（北海道南部）とライチシカ（樺太西部）のアイヌ語のあいだの同根語の割合は 73.8％である。これは、この 2 つの方言が日本語族のなかの東京と宮古（59％）や、東京と首里（66％）のことばよりも近いばかりでなく、宮古と首里の琉球語（72％）よりも近いことを示している（服部 1959: 228）。

現在では、アイヌ語は孤立言語として分類される。おそらく何らかの古代の語族の名残りであろう。アイヌ語の系統については、これまでさまざまな説が提出されてきた。印欧語族と関係づける説（Batchelor 1889［1938, 1995］, Naert 1958, Lindquist 1960；詳しくは Refsing（1998）を参照）、オーストロネシア語族と関係づける説（Gjerdman 1926, 村山 1992, 1993）や、アルタイ語族のなかの日本語・朝鮮語のグループに属し、朝鮮語に近いとする説（Patrie 1982）などである。あるいは、日本語（服部 1959）やニヴフ語（Austerlitz 1976）、エスキモー語、バスク語といった個々の言語との系統関係を証明する試みがなされてきた。しかしながら、それらの仮説のいずれも、一貫した比較言語学的手法を用いて説得力のある証拠を提示するには至っていない。もっとも大きな問題は、古い記録が無いために、たいてい現代の諸言語が比較されていることである。Vovin（1993）は、10 世紀ごろまでに話されていたアイヌ祖語の再建を試みる唯一の本格的な研究である。この研究は、『もしほ草』（1792）など、古い日本語で書かれた木版や手書きのアイヌ語辞書を含む 3 つの方言の資料に基づいたものである[(1)]。さらに Vovin（1993）は、アイヌ祖語がオーストロネシア祖語と関係づけられるのではないかとの仮説を立てている[(2)]。ここではこの仮説の妥当性は議論しないが、再建されたアイヌ祖

もとは Bugaeva, Anna. 2012. Southern Hokkaido Ainu. In: Nicolas Tranter(ed.) *The languages of Japan and Korea*. London: Routledge, 461-509. に掲載された英語論文である。

語の音韻をもとに、Vovin（1993: 158）が「アイヌ語の起源は南方に求められる」と述べているのは信憑性が高いように思われる。アイヌ語が南方の諸言語に見られる類型的特徴ももつことは偶然ではないだろう。たとえば、接頭辞をさかんに用いることはユーラシア北東部の言語では極めて稀である（中川 2009: 68）。アイヌ語は、語彙の点で日本語やニヴフ語などの隣接する北方の諸言語に由来する互いに独立したいくつかの層を含んでおり、混合的なタイプを示すことは明らかである（Vovin 1993: 158）。

考古学的研究によると、アイヌの人々は、紀元前 1 万年から 6 千年のあいだに始まった縄文文化を創り上げ、縄文語を話していたという（縄文文化は、本州では紀元前 200 年頃、北海道では紀元後 500 年頃に終わった）[(3)]。広く知られているように、歴史言語学において確立された比較の手法は、6000 年を越える期間には適用しがたい。

1.2　社会言語学的状況

アイヌ語は 1950 年代までは話されていたが、現在ではすべてのアイヌ人が日常生活で日本語を用いている。

伝統的に、アイヌ人たちは内陸部に向かって川沿いに定住し、漁労や狩猟、採集によって生活を営んでいた。自然と共生しながら、アニミズム的な世界観を持ち、すべての自然現象はカムイ（神、霊魂）[(4)]によるものと考えていた。

アイヌ人と日本人とのあいだの交流が盛んになったのは、松前藩が 1604 年に将軍徳川家康より北海道（当時は「蝦夷」と呼ばれていた）を封土として与えられ、アイヌ人との交易を独占するようになって以降のことである。その時代、アイヌ人は日本語を学ぶのを禁じられ、アイヌ人と日本人とのあいだの意志の疎通は、特別に訓練された日本人通訳を介して行なわれた。そのため、18 世紀末まで、アイヌ人は単一言語話者であった。

18 世紀、ロシアで科学と航海術が大きく発展した結果、ロシア人が極東や千島列島を探検し、北海道に接近するようになった。それに対抗して、日本の幕府は 1799 年に北海道東部（後に北海道全域）を直轄地とし、アイヌ人が日本語を学ぶのを推奨して、アイヌ人に対する同化政策を始めた。この時期は、アイヌ人たちの言語移行（language shift）の開始時期と見なされる（Refsing 1986: 63）。

1899 年に日本政府は「北海道旧土人保護法」を制定したが、もともとこの法律は、アイヌ人が近代化する日本社会に適応し、日本民族と統合するのを助けることを目的としていた。実際にはこの法律によって、言語の交替が大きく進み、義務教育の導入などを通じて、アイヌ人の伝統的な生活様式が崩壊した。しかし、アイヌ人の完全な同化は達成されなかった。アイヌ人を「旧土人」としたことが、日本社会におけるアイヌ人に対する偏見や差別の源となったためである。アイヌ語は急速に失われ、次世代にはまったく伝えられなくなった。20 世紀はじめにはアイヌ語から日本語への移行は完了した（Refsing 1986: 63）。

日本の人口調査では民族は調査されないため、アイヌ人の正確な数は不明である。2006 年に北海道庁保健福祉部によって実施された「北海道アイヌ生活実態調査」によれば、北海道で自らをアイヌと見なす人の数は 23,782 人である。これは北海道に住むアイヌ人の実際の数の半分ほどと見積もられる。また本州、とくに関東地方にかなりの数のアイヌ人（およそ 1 万人）が暮らしており、今日の日本におけるアイヌ人の総数はおそらく 10 万人に達すると考えられる。

20 世紀はじめに国家からの苛酷な民族的・言語的抑圧を経験したため、アイヌ人の多くは長いあいだ自分たちの子供にさえ民族的な出自を明かそうとしなかった。しかし、「アイヌ文化の振興並びにアイヌの伝統等に関する知識の普及及び啓発に関する法律」の制定（1997 年）、アイヌ人に対する北海道の先住民としての公式な認定（2008 年）などを経て、アイヌの人々の自らの文化や言語に対する態度には肯定的な変化が見られる。

上述の法律を受けて、アイヌ文化振興・研究推進機構が設立された。機構は北海道におけるアイヌ人口の多いすべての地域で計 14 のアイヌ語教室を運営しているほか、東京のアイヌ文化センターでもアイヌ語教室を開いている。近年、アイヌ人としての民族意識に目覚め、アイヌ語の再生の意義を認める人々が増えている。一般の人々を対象にしたアイヌ語の実用的な入門書が大いに望まれているが、未だ数は少ない[(5)]。そのような入門書には、北海道ウタリ協会編（1994）や中川裕・中本ムツ子（1997）、中川裕（2007）がある。また、言語の復興を支援することを目指した試みとしてはじめてのアイヌ語オンライン辞書（Bugaeva & Endō 2010）

もつくられた。

ちなみに、上記のアイヌ語教室を受講できるのは民族的なアイヌ人とその家族だけである。和人やその他の民族の人々がアイヌ語を学ぶ機会はまだ少なく、カリキュラムにアイヌ語のコースを持つ大学もわずかである[(6)]。一般の人々にとっては、北海道で STV ラジオが週一度放送している 15 分間の「アイヌ語ラジオ講座」が、アイヌ語を学べる唯一の手段である[(7)]。

1.3　これまでのアイヌ語研究

アイヌ語は文字を持たない言語であったが、アイヌ語をラテン文字やカタカナで書き留めようとする試みは 17 世紀からあった。語彙のリストとしてもっとも古いのは、イエズス会の宣教師 Jeloramo de Angelis が作成したものである。彼は 1618 年と 1621 年に北海道を訪れ、54 語の語彙のリストとともにローマ法王へ報告を送っている（*Relatione del Regno di Iezo, Relatione di alcune cose*, Milan, 1625）。これとほとんど同時期に、日本でのもっとも古いアイヌ語の記録である『松前の言』（117 語）が書かれた。これは北海道東部方言の記録と考えられる（佐藤 2008: 6）。ただし、いつ、どこで誰が書いたものかは正確には分かっていない（明治前日本科学史刊行会編 1971）。

それ以降、日本人やヨーロッパ人[(8)]の手によって数十編を数える語彙目録がつくられたが、20 世紀はじめに至るまで、まとまった量のアイヌ語のテキストが書かれることはなかった。アイヌ語のテキストの記録は、アイヌ語研究の次の段階、いわば、アイヌ語の言語学的研究のはじまりとなるものであった。その草分けが日本人研究者、金田一京助博士である。彼は自ら収集したテキストにもとづいて、アイヌ語の最初の学問的な文法書（金田一 1993［1931］）を著した。

アイヌ語の言語学的研究が始まってから 1 世紀以上が過ぎ、そのあいだに辞書として Batchelor（1889［1938, 1995］）、知里（1975, 1976［1953, 1954, 1962］）、服部（1964）、中川（1995）、田村（1996）、萱野（1996）が編まれた。アイヌ語の文法書・文法の梗概としては、樺太方言（村崎 1979、知里 1973［1942］）、北海道沙流方言（金田一 1993［1931］、田村 1988）、沙流・幌別方言（知里 1974［1936］）、幌別方言（切替 2003）、石狩方言（浅井 1969）、静内方言（Refsing 1986）、千歳方言（Bugaeva 2004, 佐藤 2008）がある。さまざまな文法現象についても数多くの研究論文が書かれた[(9)]。しかしながら、これらの文法書はいずれも完全なものではなく、アイヌ語研究は未だ初期段階にある。

アイヌ語は豊かな口承文芸を有しており、ユーカラ（英雄叙事詩）、カムイ・ユーカラ（神謡）、ウェペケレ（散文説話）の 3 つの大きなジャンルがある（詳細な分類については中川（1997）を参照）。北海道方言と樺太方言の数多くの口承文芸のテキストが日本人やヨーロッパ人の研究者によって記録されている。主なものに、金成・金田一 1993［1959-75］（幌別方言、北海道南西部）、知里 1981［1937］（幌別方言、北海道南西部）、久保寺 1977（沙流方言、北海道南西部）、田村* 1984-2000（沙流方言、北海道南西部）、Nevskij 1972（沙流方言、北海道南西部）（日本語版は魚井 1991）、萱野* 2005［1974］, 1998（沙流方言、北海道南西部）、佐藤 1995-98（沙流方言、北海道南西部）、中川 2000-11（千歳方言、北海道南西部）、Bugaeva 2004（千歳方言、北海道南西部）、ブガエワ 2007（鵡川方言、北海道南西部）、切替 1996（十勝方言、北海道北東部）、奥田 1991-95（静内方言、北海道北東部）、四宅ヤエの伝承刊行会編* 2007, 2011（白糠方言、北海道北東部）、Pilsudski 1912（樺太東岸方言）、村崎* 1976, 2001（ライチシカ、樺太西岸方言）などがある。カムイ・ユーカラのすぐれたコレクションである知里幸恵 1978［1923］（幌別、北海道南西部）（英語版は、片山 2003 と Strong 2011）や、砂沢 1983（石狩方言、北海道北東部）の自叙伝など、アイヌ語の話者自身によって書かれたテキストも幾つかある。

ほかの危機に瀕した諸言語に較べれば、アイヌ語は比較的研究が進んでいる。しかし、アイヌ語の記録がもっぱら口承文芸のテキストの録音に限られ、田村（T3）や村崎（1976: 3-9）のような会話のテキストがごくわずかであることは問題である。残念なことに、もはや新しく会話のテキストを録音することは不可能である。

もうひとつの問題として、音声付きのアイヌ語のテキストがわずかであることが挙げられる（上記の口承文芸テキストのリスト中、音声付きのものはアステリスクを付した）。そのため、グロス、ラテン文字・カタカ

ナによる転写、和訳・英訳を具え、音声または動画ファイルの付いた「新世代の」アイヌ語テキストが大いに望まれている。Nakagawa & Bugaeva（forthcoming；沙流方言、北海道南西部）はその好例である。また、日本には、アイヌ語口承文芸の古い録音が個人や研究所所蔵の形で公開されずに数多く残されている。それらを書き起こすことのできる人材が俟たれるところである。

1.4　北海道南部のアイヌ語の概要

以下は、沙流方言や千歳方言を含む北海道南部のアイヌ語（北海道南西部方言）の音韻と形態・統語法の概略である。この方言グループは、ほかのアイヌ語の方言に較べて、はるかに記述・研究が進んでいる。これは、20 世紀後半から 21 世紀はじめにも母語話者がいたことによるものである。ただし、これらの方言の示す特徴のなかには、「アイヌ語」全体に共通するとは決して言えないようなもの含まれる[10]。そのような特徴については特別に解説する。千歳方言の資料として、著者の調査資料（OI；Bugaeva 2004）、ならびに中川（1995, 2000-11）と佐藤（2008）を参照する。沙流方言については、Nakagawa & Bugaeva（forthcoming）、田村（1984-2000, 1988（2000）, 1996）、久保寺（1977）などの資料を参照する。そのほかの研究文献からの資料も利用した。千歳方言と沙流方言の差異は大きなものではないが、その違いが意味を持つ場合は特別に述べる。ほかのアイヌ語の方言についても適宜言及する。

2　音韻

2.1　子音

ほかのすべてのアイヌ語方言と同様に、北海道南部のアイヌ語は 12 の子音音素を持つ：/p/、/t/、/k/、/c/、/s/、/r/、/m/、/n/、/w/、/y/、/h/、/ʔ/（表 1）。この解釈は声門閉鎖音 /ʔ/ をのぞき、アイヌ語の音素表記として広く受け入れられている（田村 1988 など）。声門閉鎖音 /ʔ/（/’/ と表記されることもある）は、その現れが環境から予測できるので、表記では普通は省略される。声門閉鎖音は、ほかに子音音素が無ければ音節頭に現れる。声門閉鎖音を独立した音素として扱うかどうかについては、研究者のあいだで必ずしも意見が一致していない。

表 1　北海道南部のアイヌ語の子音音素

	両唇	歯茎	硬口蓋	軟口蓋	声門
破裂（閉鎖）音	p	t		k	ʔ
摩擦音		s			h
破擦音		c			
弾き音		r			
鼻音	m	n			
わたり音	w		y		

/p/、/t/、/k/ は音節頭では通常の閉鎖音として実現するが、音節末では破裂しない（[pˀ]、[tˀ]、[kˀ]）。例：[ka**p**ˀ]「皮膚、樹皮」、[ku**t**ˀ]「腰帯」、[si**k**ˀ]「目」。母音間や鼻音 /m, n/、弾き音 /r/ の後ではしばしば有声化して［b］、［d］、［g］となる（有声化は必ず起こるわけではない）。例：*sampe*［sam**b**e］「心臓」、*kirpu*［kiɾ**b**u］「脂肪」。現代のアイヌ語の諸方言には有声／無声の区別はないが、アイヌ祖語にはそれがあったようである（Vovin 1993: 175）。樺太方言（タライカ方言をのぞく）では、、音節末の /p/、/t/、/k/、ならびに弾き音 /r/ は中和して /h/ になる。これはこの方言での独自の変化の結果であると考えられる。例：*ka**h***「皮膚」、*ku**h***「腰帯」、*si**h***「目」（上記の北海道方言の形と比較されたい）、*uta**h***「人々」（北海道方言では *uta**r***）。

/s/ は［s］あるいは口蓋化して［ʃ］として実現する。佐藤（2008: 11）など、日本人研究者の多くは、/s/ を口蓋化した［ʃ］であると記述しているが、田村（2000［1988］: 19）によれば、沙流方言では口蓋化の程度に個人差がある。口蓋化の区別を持つロシア語の母語話者である筆者には、北海道南部方言の /s/ は、東京の日

本語の /s/ に較べ、ほとんどの環境で口蓋化の程度が低いように感じられる。千歳方言についての筆者の記述を参照されたい：“As a rule, it is not palatalized, unless it is followed or preceded by /i/. Cf.［mu**s**］‘a fly’,［uray-u**s**nai］‘the name of a village in folktales’,［pa**s**］‘to run’,［o**s**］‘after’, but［ʃine］‘one’,［ʃinutapka］‘the name of a village in folktales’,［piʃ］‘beach’,［niʃpa］‘rich man’”（Bugaeva 2004: 11）。

/c/ は無声歯茎破擦音［tʃ］として、あるいは一部の話者では［ts］として実現する。例：*cup*「月／太陽」の発音は［**tʃ**up˺］あるいはやや稀に［**ts**up˺］。鼻音 /m, n/ 後では有声破擦音［dʒ］となる。例：*konci*［kon**dʒ**i］「頭巾」。

/r/ は、日本語と同じように、有声歯茎弾き音［ɾ］である。一部の話者では歯茎の震え音［r］として実現することが稀にある。音節末の /r/ のあとで、しばしばその前の母音が繰り返されることがあるが、繰り返される母音は音素的ではない。例：*pirka*［pi**ɾi**ka］「良い」、*ko**r***［ko**ɾo**］「持つ」、*uta**r***［uta**ɾa**］「人々」。このような母音は、たいていはっきりとは発音されず、シュワー［ə］のように実現する。例：*ko**r***［koɾə］「持つ」、*punka**r***［punka**ɾ**ə］「つる草」（Bugaeva 2004: 12）。この「母音のコピー」は、開音節言語の日本語との接触によって生じたものであるかもしれない。「母音のコピー」は、最後の世代のアイヌ語話者の発音にとくに顕著である。

/m/ と /n/ は、閉鎖音 /k/ の前では軟口蓋音［ŋ］として実現する。そのほかの環境ではそれぞれ常に両唇音［m］、歯茎音［n］である。

/w/ と /y/ はそれぞれわたり音［w］、［j］である。

/h/ は声門摩擦音［h］であり、母音間ではきわめて捉えにくい。例：*uwekoh**h**opi*「ばらばらに」（Bugaeva 2004: 12）。田村（1988: 13）は「母音間ではしばしば弱まって有声化する」、つまり有声声門摩擦音［ɦ］になると述べている。日本語と同様に、/u/ の前ではしばしば無声両唇摩擦音［ɸ］として実現する。

既に述べたように、/ʔ/ は声門破裂音（声門閉鎖音）で、ほかの子音がない場合に、音節頭に現れる。例：*’arpa*「行く（sg）」。書く際にはふつう省略されるが、本稿では、子音で終わる音節のあと、すなわち、音節の切れ目とアクセントの付与に影響する可能性がある場合に限り表記することにする。例：*wén.’e.kot*「ひどい死にかたで死ぬ」（声門閉鎖音を表記しないと、*we.né.kot* という可能性が生じる；2.3 節を参照；ピリオドは音節境界を示す）。声門閉鎖音は母音間で弱化する傾向があるが、*’o’ár*「完全に」のように、アクセントがある音節では弱化しない（Bugaeva 2004: 12）。田村（1988: 13）は、アクセントのある音節に続く音節では声門閉鎖音はしばしば省略されると述べている。例：*uk**áo**mare*「積み上げる」（← *uk**á’o**mare*）。一般に、日本語の影響により、アイヌ語の最後の世代の話者たちは、声門閉鎖音の発音について一貫せず、脱落させてしまうことが多い。

2.2　母音

アイヌ語は 5 つの母音を持つ。日本語の対応する母音とほぼ同じである。

i　　*u*
　e　　*o*
　　a

日本語の母音とは異なり、/u/ と /o/ はやや円唇である。また、/u/ は日本語の「ウ」よりも後ろで発音され、とくに強勢のない位置では /o/ と間違えやすい。英語やロシア語の話者にとってもアイヌ語の /u/ と /o/ の聞き分けが難しいことは、Chamberlain（1887）のタイトルが“Aino fairy tales”であることや、Batchelor（1889［1936, 1995］）や Dobrotvorskij（1875）に数多くの誤りが見られることからも明らかである。

金田一（1993［1931］: 148-49）と知里（1974［1936］: 7）は、アイヌ語に二重母音があると主張した[11]。しかし、金田一らが二重母音と見なしたものは、現代では母音とわたり音（/w/、/j/）の連続と分析される。

北海道方言には母音の長さによる区別はないが、樺太方言にはその区別があり（村崎 1979）、アイヌ祖語にあった特徴の名残であると考えられている（田村 2000［1988］: 22）[12]。

2.3　音節構造

アイヌ語の音節構造は CV（C）であり、CV あるいは CVC として実現する。例：*re*「3」、*cip*「ボート」、*ʔa*「坐る（sg）」。母音で始まる音節（*V、*VC）は基本的にはないが、アイヌ語の最後の世代の話者たちの発音には、声門閉鎖音の省略による、母音始まりの音節がしばしば現れる。いずれの子音も音節頭に立ちうる。北海道南部のアイヌ語では、/c/、/h/、/ʔ/ の 3 つの子音は音節末の位置に現れない。音節の形成にはさまざまな制限があり、たとえば、北海道南部のアイヌ語では *ti*、*wi*、*ʔuw*、*ʔiy* は許容されない。

2.4　超分節要素

静内方言や様似方言など（佐藤 2008: 14, Refsing 1986: 73 を参照）の北海道東部の方言とは異なり、北海道南部のアイヌ語は明瞭に区別のできる高低アクセントを持つ[13]。アイヌ語の高低アクセントは、日本語の東京方言のような、高から低に下がる位置がアクセントパターンを決定する「下げ核アクセント」とは逆で、低から高へ上がる位置が重要な「昇り核アクセント」である。

北海道南部のアイヌ語ではアクセントが弁別的であるとされる（*niná*「粉々にする」と *nína*「薪を集める」、*nisáp*「脛」と *nísap*「突然に」を比較）。しかし、アクセントのみによって区別される最小対は非常に少なく、たいていの場合は、アクセントはアクセント規則によって自動的に与えられる。アクセント規則は次の通り。強勢は第一音節が閉音節であれば、そこに置かれる。第一音節が開音節であれば、二番目の音節に置かれる（例：*ʔáp.to*［C**V**C.CV］「雨」と *ko.tán*［CV.C**V**C］「村」、*sa.pá.ha*［CV.C**V**.CV］「彼／彼女の頭」）。

このアクセント規則には数多くの例外がある。たとえば、*nú.pe.he*［C**V.**CV.CV］「彼／彼女の涙」、*tére*［C**V.**CV］「待つ」。北海道方言のこのような不規則なアクセントパターンは、歴史的に樺太方言（ならびにおそらくアイヌ祖語；注 13 を参照）の長母音に対応する。例：*mína*「笑う」（北海道）–*miina*（樺太）。不規則なアクセントパターンは日本語からの借用語にも見られる（例：*káne*「金属、お金」）。

不規則なアクセントパターンが生まれるもうひとつの理由として、付加的な形態法の影響が挙げられる。たとえば、使役を表す接尾辞 ***-re***/***-e***/***-te*** はアクセントに影響を与えない[14]。例：*kú*「飲む」–*kú*-***re***「飲ませる」（アクセント規則から予想される **ku*-***ré*** にはならない）。人称接辞についても同じことが当てはまる。人称接辞にはアクセントに影響しないもの（付属語 clitic に近いもの）とアクセントに影響を与えるもの（純粋な接頭辞）がある。詳細については、Tamura（1970）を参照。

2.5　形態音韻法

音素の現れについてはさまざまな制限があり、音節境界において、好まれない音素連続の生起を避けるために音素の交替（連音 Sandhi）が起こる。その制限にはある種の形態素が含む音素にのみ適用されるものもあり、そのような場合には、形態音韻的な交替が引き起こされる。これらに関しては方言差や個人差が大きい。

沙流方言について報告されている音韻的な交替を下に列挙する（田村 1979、2000［1988］）。ここでは、同化型と異化型の 2 つのタイプに分類した。

●逆行同化（例は田村 1979: 1 より）：

(1)	/t＋i-/ > /ci/ :	*mat-ikor*		> /ma**ci**kor/「妻の宝物」
		妻 - 宝		
(2)	/r＋t/ > /tt/ :	*ku＝kor*	*tasiro*	> /ku＝ko**t** **t**asiro/「私の剣」
		1SG.A＝持つ	剣	
(3)	/r＋c/ > /-tc-/ :	*ku＝kor*	*cise*	> /ku＝ko**t** **c**ise/「私の家」
		1SG.A＝持つ	家	
(4)	/r＋n/ > /nn/ :	*ku＝kor*	*nonno*	> /ku＝ko**n** **n**onno/「私の花」
		1SG.A＝持つ	花	

(5)　/n＋s/ > /ys/ :　*pon*　*sísam*　> /poy **s**ísam/「小さな和人」
　　小さな　和人

●順行同化（田村 2000［1988］: 24）：

(6)　/m＋w/ > /mm/ :　*isam*　*wa*　> /isam **m**a/「（彼／彼女が）消えた、そして」
　　存在しない　そして

●相互同化（田村 2000［1988］: 24）：

(7)　/n＋w/ > /mm/ :　*an*　*wa*　> /am **m**a/「（彼／彼女が）いた、そして」
　　存在する.SG　そして

●逆行異化（田村 1983: 1）：

(8)　/r＋r/ > /nr/:　*ku＝kor*　*rusuy*　> /ku＝kon **r**usuy/「私は（それが）欲しい」
　　1SG.A＝持つ　DESID

北海道南部のアイヌ語やそのほかの方言には、ほかに、わたり音の挿入（glide insertion）やわたり音の形成（glide formation）がある。どちらの現象も伝統的には上記の現象と同様に、母音の連続を避けるために起こる純粋に音韻的なプロセスであると考えられてきた（金田一 1993［1931］: 5; 知里 1974［1936］: 13-14; 田村 1996: 820, 833）。わたり音 /**j**/ の挿入は、母音が連続し、最初の母音が /**i**/、後の母音が /**a**, **e**, **o**, **u**/ の場合に起こる（例（9a））。それに対し、わたり音 /**w**/ の挿入は、連続する二つの母音のうち最初の母音が /**u**/、二番目の母音が /**a**, **e**, **o**/ の場合に起こる（例（9b））。どちらの場合でも、二番目の母音の前の声門閉鎖音は脱落する。一方、基底形の母音 /**i**/, /**u**/ が母音間に現れるときには、わたり音の形成、つまり /**i**/ > /**j**/（例（10a））あるいは /**u**/ > /**w**/（例（10b））のような変化が起こる。

(9)　a.　*si-**y**-oka*
　　REFL-EP- 後ろ
　　「自分の後ろ」（AB 16）
　　b.　*u-**w**-ekap＝an*
　　REC-EP- 挨拶する＝IND.S
　　「私たちは互いに挨拶した」（AB 16）

(10)　a.　*ku＝**y**-ómap*（<*ku＝**í**-omap*）
　　1SG.S＝APASS- 愛する
　　「私は子供たちを愛している」（Satō 2003: 19）
　　b.　*ko-**w**-é-peker*（< *ko-**ú**-e-peker*）
　　to.APPL-REC-with.APPL- 明るくなる
　　「…に話をする」（AB 17）

しかし、千歳方言では、Satō（2003: 12）が指摘するように、わたり音の挿入にも、わたり音の形成にも「形態的な要因も関与している」。すなわち、これらは形態音韻的なプロセスなのである。Satō（2003: 18-19）によれば、わたり音の挿入はある種の接頭辞、たとえば不定人称 O の ***i***＝、逆受動 ***i***-、再帰 ***si***-、再帰 ***u***- などの後でしか起こらない。2 人称複数 S/A/O の ***eci***＝（11）などのほかの接頭辞や抱合された名詞語根は、同じ音韻的環境をもたらしたとしても、わたり音の挿入を引き起こさない。

(11)　*eci＝'opitta*
　　2PL.A＝すべて
　　「お前たちみな」（AB 17）; **eci＝**y**-opitta***

同様に、わたり音の形成は /**i**/ と /**u**/ がある種の接頭辞、すなわち、次の音節にアクセントを付与する性質を持つ（C）V タイプの接頭辞に先行された場合にのみ起こる（例（10））。たとえば、1 人称単数 S/A の ***ku***＝、2 人称単数 S/A/O の ***e***＝、不定 O の ***i***＝、逆受動 ***i-***、適用態 ***e-***、***ko-***、***o-*** など（それに対して、不定 A の ***a***＝や 2 人称複数 S/A/O の ***eci***＝はわたり音の形成を引き起こさない）。

また、例（12）、（13）に見るように、人称接頭辞の 1 人称単数 S/A の ***ku***＝と 1 人称複数除外 A の ***ci***＝に適用されるいくつかの形態音韻的な交替がある。どちらの交替も、北海道南部方言にのみ見られるものである。

（12）　*ku*＝＋*a / e / o / u*　→　***k***＝ *a / e / o / u*（*ku*＝の一部 /u/ が消える）
　　ku＝＋*apkas*　→　*k*＝*ápkas*「私が歩く」
（13）　*ci*＝＋*a / e / o / u*　→　***c***＝*a / e / o / u*（*ci*＝の一部 /i/ が消える）
　　ci＝＋*eramuan*　→　*c*＝*éramuan*「私たちが理解する」

3　形態法：品詞

田村（2000［1988］: ii）は以下のような品詞を設定している[15]。筆者はその下位クラスのなかでのわずかな再分類（削除すべきものを丸括弧に入れて示す）と、より一般的な術語の使用（角括弧に入れて示す）を提案したい。

(1)　動詞：完全［＝ゼロ項］動詞、自動詞、他動詞、コピュラ
(2)　代名詞［人称代名詞／疑問代名詞］
(3)　名詞：普通名詞、位置［＝関係］名詞、独立性の弱い［＝拘束］名詞、（名詞化辞）
(4)　連体詞［＝限定詞］: 数連体詞［＝数量限定詞］、空間的指示詞［＝名詞的指示詞］、観念的指示詞［＝照応指示詞］[16]
(5)　副詞：普通［＝一般］副詞、後置副詞
(6)　接続詞
(7)　助詞：格助詞、副助詞、終助詞、接続助詞と接続詞［＝接続助詞］、助動詞、名詞化助詞
(8)　間投詞

さらに、これらの品詞を、開いた語彙クラスと閉じた語彙クラスに分けてみよう。

(a)　開いた語彙クラス：すべての動詞、普通名詞、一般副詞
(b)　閉じた語彙クラス：位置名詞、拘束名詞、数量限定詞、後置副詞、間投詞
(c)　閉じた転換詞（shifters）クラス：すべての代名詞、名詞的指示詞、照応指示詞
(d)　閉じた文法システム：すべての接続詞、すべての助詞

品詞の分類／下位分類にはさまざまな問題が伴うが、これは将来の課題である。

アイヌ語の語形成の手段には、接辞、重複、複合がある（詳細は田村 2001［1972b］, 2001［1973］, 2000［1988］: 193-224、佐藤 2008: 265-79 を参照）。以下では二つの主要な品詞として、名詞と動詞、ならびに、言語類型論的な観点からとくに興味深い限定詞について概観する。

3.1　名詞

名詞は形態統語的な特徴にもとづき、（i）普通名詞、（ii）関係名詞、（iii）拘束名詞の 3 つの下位グループに分類される。

普通名詞は「概念形」と「所属形」を持つ。概念形は自由形式で、無標である。一方、所属形は拘束形式であり、所有接尾辞、および、所有者を相互参照（cross-reference）する A（＝他動詞主語）系列の人称接頭辞

をとる（例：*sik*「目」–***ku***＝*sik-ihi*「**私の**目」）。樺太方言とは異なり、北海道南部のアイヌ語ではすべての普通名詞に所属形があるわけではない（田村 2001［1964］, 2001［1966］）。

関係名詞は、ヨーロッパの諸言語であれば副詞や前置詞で表現されるような空間・時間的な関係を表す。たとえば、*ka*「上」、*corpok*「下」、*etok*「前」など（田村 2001［1982］, 2001［1993］, Tamura 1983b、中川 2001［1984］を参照）。普通名詞と同様に、関係名詞にも概念形と所属形があるが、その分布は普通名詞のそれと同じではない（下の例を参照）。主な形態統語的な違いは、関係名詞では所有者の人称・数が O（＝目的語）系列の接頭辞で標示される点にある：***en***＝*sam*「**私の**近く」。なお、3 人称の人称接頭辞は無い：*menoko sam-a*「女の近く」、*cikuni sam*「木の近く」（「女」のような 3 人称の有生の所有者の場合にのみ所有接尾辞が現れ、「木」では普通現れない）。

拘束名詞は独立では用いられず、常に限定詞や名詞、関係節によって修飾されねばならない。例：*tan kur*「この男／人」、しかし、**kur*「ある男／人」。拘束名詞の数は多くない：*kur*「人」、*utar*「人々」、*uske*（*he*）「（その）場所／時間」、*pe*/*p*「モノ／人」、*hike*「方、側」、*hi*/*i*「場所／時間」。これらはすべて接尾辞として文法化される途上にある。最後の 3 つにはすでに派生接尾辞（3.3）、従属接続詞（4.6）としての用法がある。

「名詞化辞」と呼ばれる証拠性 evidential の意味を持ついくつかの語があり、田村（2000［1988］: 92）はこれらを名詞の下位グループとしている。名詞としての意味が明瞭であることや所有接尾辞の存在から、それらが名詞を起源としていることは明らかであるが、現在では主要な機能は証拠性の標示であり、助詞として扱いたい。推測を表す *ruw-e*（<「…の跡」）、報告を表す *haw-e*（<「…の声」）、非視覚的な情報であることを表す *hum-i*（<「…の音」）、視覚的な情報であることを表す *sir-i*（<「…の光景」）がある（4.4.2.1 節を参照）。

3.2　動詞

名詞と動詞の区別は（形態には反映されないものの）明確である。ただし、自動詞の多くは名詞としても用いられる。動詞は 3 つの主要な下位グループ（i）ゼロ項動詞、（ii）自動詞、（iii）他動詞と（iv）コピュラに分類される。形態的に区別されるような形容詞のクラスは存在しない。ほかの言語で形容詞で表されるような内容は、例（14b）のように、アイヌ語では自動詞によって表現される。

ゼロ項動詞のグループは天候を表す動詞から成る。たとえば *sir-pirka*「良い天気だ」のように、このタイプの動詞はたいてい抱合された主語 *sir*「様子、地面」を含む。主語をとることが決してないことから、アイヌ語学では、これらの動詞は「完全動詞」と呼ばれてきた。ダミーの主語も許されない。

ほかの動詞はすべて、項の人称・数を相互参照する人称接辞を義務的に伴う。人称によっては S、A、O の全てで人称接辞の形が異なることがある（表 2）[17]。

3 つの名詞項をとる他動詞もある。3 項動詞は、2 項動詞と同じように、A 系列と O 系列の人称接辞をとる。2 項動詞と異なるのは、無標の目的語をいくつ伴うかという点だけである。3 項動詞はすべて、適用態や使役によって派生されたものである（4.4.1.1 節、4.4.1.2 節を参照）。

コピュラ *ne*「である／になる」は、上に挙げた 3 つの動詞クラスからは区別される。他動詞と同じように、主語を A 系列の人称接辞で標示するが、他動詞とは異なり、（補語を標示すべき）O 系列の人称接辞はとらない。例（16a）、（16b）を参照[18]。

アイヌ語の動詞には、単数と複数で、異なる動詞語幹を用いるものや（＝補充法）、異なる接尾辞を用いるものがある。その交替は、自動詞では S の指示対象の複数性、他動詞では O あるいは被動者的な A の指示対象の複数性によって条件づけられる。アスペクトやムード、証拠性を標示する助詞がいくつかあるが、純粋に時制を標示する要素はない。

3.3　限定詞

国語学の伝統にならい、田村（2000［1988］: 36）はこのクラスを「連体詞」と呼んだ。「連体詞」は語のクラスというよりはむしろ統語構造におけるある種の位置を指す術語である。ヨーロッパの伝統では、このような語は一般に「限定詞 determiners」と呼ばれる。“words that fill the determiner slot function to specify, identify,

or quantify the following noun phrase”（限定詞の位置を占める語は、後ろに続く名詞句を指定・特定したり、その数量を示したりする機能を持つ）（Payne 2006: 124）。

アイヌ語には 3 種類の限定詞（i）数量限定詞、（ii）名詞的指示詞、（iii）照応指示詞がある。

限定詞はいずれも名詞の前の位置にしか現れることができず、それ自身で完全な名詞句となることができない。これは通言語的にやや珍しい（Dixon 2010: 225）。例：***tan*** *cise*「この家」（cf. **tan*「この」）。「指示代名詞」的な機能を果たすためには、拘束名詞の *pe*/*p*「モノ」が用いられねばならない。例：*tan pe*「これ」（3.1 節を参照）。同様に、数量限定詞 ***tu*** *cise*「2 軒の家」、*tu-p*「2 つ（のモノ）」（**tu* だけでは用いられない）。ちなみに、最後の例では、拘束名詞 *pe*/*p* は名詞派生接尾辞として再解釈され、「非人間」の類別接尾辞としての機能を得ている。「人間」の類別接尾辞は母音の後で *-n*、子音の後で *-iw*。例：*tu-**n***「2 人」、*iwan-**iw***「6 人」。

北海道南部のアイヌ語は 3 系列の指示詞を区別する興味深い体系を持つ。そのうち 2 つの系列は近称の名詞的指示詞であり、残る 1 つの系列は遠称の名詞的指示詞である（田村 2000［1988］: 261）。

- *tan*（強調形は *tapan*）…目に見える存在を表現し、会話における新しい話題、会話が行われている場所の近くに位置するものを指す。「これ、ここ」。
- *taan*…話者のすぐ近くにあるものを指す。「これ、ここ」。
- *toan*…自分から切り離されたもの。「あれ、あそこ」。

また、これらの名詞的限定詞が照応（anaphoric/cataphoric）には用いられないことも、通言語的に見て珍しい特徴である（Dixon 2010: 250）。これらとは別に、照応のためだけに用いられる限定詞がいくつかあり、仮に、それらを（a）とくに近い照応、（b）近い照応、（c）遠い照応、（d）とくに遠い照応の 4 つに分類することができる。（b）、（c）、（d）の限定詞は数の区別を持つ。

- *ne*「この」（文字どおりには、「…であるところの」（< コピュラ *ne*））

話題となっている人物やモノを指示する名詞の前に置かれる。

- *ne wa an*（SG）、*ne wa oka*（PL）「まさにその」（< コピュラ *ne*＋*wa*「そして」＋*an*/*oka*［存在する .SG/PL］）
- *néa*（SG）、*nérok*（PL）「あの」（< コピュラ *ne*＋完了 *a*/*rok*［SG/PL］）

以前話題になった人物／モノを聞き手に思い起こさせる。

- *ikia*（SG）、*ikirok*（PL）「あの」（< *iki*「する」＋完了 *a*/*rok*［SG/PL］）

以前に何かをした人物や動物を指示する（田村 2000［1988］: 263-4）。

4　統語法

アイヌ語の文構成素の基本的な順番は SV/AOV である。修飾語は前置される。従属節は主節の前に置かれる。助詞（1.3）はすべて後置される。話題となる名詞句は文の最初に置かれる傾向がある。スペースの都合で、ここでは人称標示（4.1 節）、後置詞（4.2 節）、名詞句の構成（4.3 節）、動詞句の構成（4.4 節）について述べる。説明されないことがらについても、さまざまな例文で示される通りである（たとえば、文を繋ぐ接続詞や補文標識については 4.6 節の例を参照）。

4.1　基本的な統語機能の標示

名詞項（S/A/O）には、それが代名詞であるか名詞であるかにかかわらず、格標識はない。それ以外の名詞句の機能は後置詞によって示される（4.2）。

人称代名詞（表 2）は活用しない。主語（S/A）や目的語（O）である場合にしばしば省略される[19]。アイヌ語はいわゆる代名詞省略（pro-drop）型の言語であるが、動詞における人称標示は義務的である。動詞における人称標示に関して、アイヌ語は混合型の体系を持つ。すなわち、2・3 人称では中立型（A、S、O はいずれも 2 人称単数 ***e***＝、2 人称複数＝***eci*** で標示され、3 人称では常にゼロ）であるのに対し、1 人称単数では主格・対格型（A/S は ***ku***＝、O は ***en***＝）、1 人称複数といわゆる「不定人称」では三立型（S、A、O それぞれが異なる形式で標示される）である。

それぞれの人称接辞の形態的な位置づけは一様ではない。独立した語としての性質を持つものもあれば、付

表 2　アイヌ語沙流方言・千歳方言における人称・数の標示

	人称代名詞（A/S/O）	A	S	O
1 単	***káni***「私」	***ku***＝	***ku***＝	***en***＝
1 複 . 除	***cóka*** (***y***)「私たち」（私と彼／彼女／彼ら／彼女ら）」	***ci***＝	＝***as***	***un***＝
2 単	***eani***「お前」	***e***＝	***e***＝	***e***＝
2 複	***ecioká***「お前たち」	***eci***＝	***eci***＝	***eci***＝
3 単	***sinuma***「彼／彼女」	Ø	Ø	Ø
3 複	***oka***「彼ら／彼女ら」	Ø	Ø	Ø
不定人称	（***aoka***）	***a***＝	＝***an***	***i***＝

属語や接辞に近いものもある。たとえば、＝***an***、＝***as*** はほかの語によって語幹から切り離されることがあり、プロソディ的に独立した単位を成すので、独立した語と分析できる。***a***＝、***eci***＝は語幹から離れることができず、アクセントを持たないので、拘束形態素である。しかしながら、語幹の強勢の位置を変えることはないので、典型的な接頭辞とは異なる。そのため、***a***＝と ***eci***＝は付属語であると分類される。それに対して、***ku***＝、***ci***＝、***e***＝、***en***＝、***un***＝、***i***＝は、語幹から離れることがなく、また、一般的なアクセント規則に従って強勢の位置を変える（Tamura 1970: 305）ので、完全に接頭辞である。このような形態的な性質の違いは、独立の代名詞から義務的な人称接辞へという、一般によく見られる文法化の異なる段階にあることを示している。さらに、“existing personal pronouns can be replaced by a set of new personal pronouns but survive as verbal clitics or affixes”（人称代名詞は新しい人称代名詞によって取って替わられるが、動詞に付く付属語や接辞として残る）（Heine 2007: 95）と指摘されるが、これはまさにアイヌ語で起こったことにほかならない。北海道南部方言の「新しい」人称代名詞（表 2）は二次的に発達した結果としての特徴を明らかに示している。すなわち「古い人称代名詞」＋位置／場所動詞 ***an***（SG）/***oka***（PL）＋名詞化辞 ***-i***/***-y***（< ***hi***「モノ／場所／時」）という形式をもつ。たとえば、***eani***「お前（SG）」（< ***e***＝***an-i***［2SG.A/S/O＝存在する .SG- モノ .NMLZ］）は、文字どおりには「お前がいる場所」という意味である（Bugaeva 2011a: 524）。

（14）と（15）はそれぞれ基本的な自動詞構文と他動詞構文である。自動詞述語では S が、他動詞述語では A と O が標示される。

（14）a.　*k＝unu-hu*　　*Ø＝omke*　　*a*　*Ø＝omke*　　*a*
　　1SG.A＝母 -POSS　　3.S＝咳をする　　itr　3.S＝咳をする　　itr
　　「私の母は何度も［＝ひどく］咳をした」（N 130 に基づく）
　b.　*réra*　　*Ø＝ruy*
　　風　　3.S＝強い
　　「風が強い」（KS #0762）
　c.　（*káni*）*ku＝mina*
　　1SG　1SG.S＝笑う
　　「私は笑った」（OI）
（15）a.　（*káni*）　*cikap*　　*ku＝Ø＝nukar*
　　1SG　　鳥　　1SG.A＝3.O＝見る
　　「私は鳥を見た」（T1 15）
　b.　*toan*　*hekaci*　*Ø＝en＝koyki*
　　その　少年　　3.A＝1SG.O＝いじめる
　　「その少年は私をいじめた」（T1 30）

c. *eci＝én＝hotuyekar　yak　pirka　p!*
2PL.A＝1SG.O＝呼ぶ　もし　良い　しかし
「あなた達は私に声をかけてくれればよかったのに！」（T1 36）

d. *eci＝nukar　rusuy　kusu　te　ta　eci＝hunara*
1SG.A＋2SG.O＝会う　DESID　だから　ここ　LOC　1SG.A＋2SG.O＝探す
「お会いしたくてここで探していました。」文字通りには「お前に会いたかったら、私はお前を探していた」（KS #0009）

コピュラ文は、A（＝主語）が標示されるが、O（＝補語）が標示されないという点で、特殊なタイプである。

（16）a. [*cóka*]$_{CS}$　[*tu-n*]$_{CC}$　*ci＝ne*　*na,*　*tu-p*
1PL.EXC　二 - 人.CL　1PL（.EXC）.A＝COP　FIN　二 - もの .CL
en＝kor-e　*yan*
1SG.O＝持つ -CAUS　IMP.POL
「わたしたちは二人ですよ。二つ下さい。」（KS #2961）

b. [*cóka*]$_{CC}$　*Ø＝ne*
1PL.EXC　3.A＝COP
「それは私たちです。」（T2 53）

A の標示は O の標示の前に現れることになっているが、実際には、（15c）のように両方の標示が明示的に現れる例はほとんどない（3 人称の標示は明示的ではないことに注意）。また、1・2 人称の組み合わせに関しては、（15d）に見るように、動詞の人称標示が 2 つの接頭辞に分析できない場合もある。これについては方言的な差異も大きい。たとえば、北海道南部方言では、1 人称単数／複数の A と 2 人称単数／複数の O の組み合わせの際、決して ***ku＝e＝**、***ku＝eci＝**、***ci＝e＝**、***ci＝eci＝**のような形式にはならず、必ず ***eci＝***（本来 2 人称複数の A/S/O）となる（表 3）。

表 3　アイヌ語沙流方言・千歳方言における他動詞の主語・目的語の標示
（田村（2000［1988］: 59）にわずかな変更を加えた）

A\O	1 単	1 複	2 単	2 複	3 単／3 複	不定
1 単	—	—		***eci＝***	***ku＝Ø＝***	***ku＝i＝***（/kuy/）
1 複	—	—		***eci＝***	***ci＝Ø＝***	***a＝i＝***
2 単	***en＝***	***un＝***	—	—	***e＝Ø＝***	***e＝i＝***（/ey/）
2 複	***eci-en＝***	***eci＝un＝***	—	—	***eci＝Ø＝***	***eci＝i＝***
3 単／複	***Ø＝en＝***	***Ø＝un＝***	***Ø＝e＝***	***Ø＝eci＝***	***Ø＝Ø＝***	***Ø＝i＝***
不定	***a＝e＝***	***a＝un＝***	***a＝e＝***	***a＝eci＝***（沙流） cf. ***aci＝***（千歳）	***a＝Ø＝***	***a＝i＝***

（17）に示すように、1 人称複数と不定人称において、S と A（と O）の標示が異なるため、自動詞と他動詞の区別は明確である。

（17）a. *neno　é＝iki　yak　**a**＝e＝kóyki　na*
このように　2SG.S＝する　ば　IND.A＝2SG.O＝叱る　FIN
「そんなふうにあなたすると叱られるよ。」文字通りには「人があなたを叱る」「（T2 30）

b. *te* *ta* *rok*＝***an*** *ciki* *pirka?*
ここ LOC 坐る.PL＝IND.S たら 良い
「ここに座ってもいいですか？」文字通りには「ここに人が座ってもいいですか？」（KS #1660）

不定人称は、ひとつの形式で表されるいくつかの機能をまとめたものである。不定の話し手や聞き手を指示する場合[20]には、人称代名詞 *aoka* は用いられない。また、実際の（不定の）指示対象が単数であるか複数であるかにかかわらず、もともとは例（17b）のように動詞の複数形のみが用いられたと考えられる。そのほかの主な機能として、包括的 1 人称（例（18））、2 人称単数／複数の尊称形（例（19））、談話の話し手を指示する logophoric な機能[21]（例（20））がある。田村（2000［1988］: 74）はこの logophoric な機能を「引用文中の 1 人称」と呼んでいるが、これはアイヌ語研究者以外には理解しにくく、ある種の「真の」1 人称であると誤解される可能性がある。そこで筆者は、西アフリカの言語に見られる現象と似たものとして、‘logophoric’ という術語を提案した（Bugaeva 2008a, b）。アイヌ語では、logophoric な不定人称は、主節の主語が 2・3 人称単数（例（20b））あるいは複数（例（20a））のとき、埋め込まれた節（＝引用文）において現れる。その際、主節の主語と、埋め込まれた節の S/A/O あるいは所有者が同じ指示対象を持つ（Bugaeva 2008a: 43-4）。

（18）a. 最小の包括的 1 人称（1＋2）「私とお前」
suy *u-nukar*＝***an*** *ro*
再び REC- 会う＝IND.S HOR
「（私とお前は）また会おう」（AB 94）

b. 拡張包括（1＋2＋3）「私とお前と彼／彼女／彼ら／彼女ら」
aoka *anak,* *kamuy* *renkayne,* *ri* *uske* *ta* *oka*＝***an***
IND TOPIC 神 のおかげで 高い 所 LOC 存在する.PL＝IND.S
kusu *i-sitoma* *ka* *somo* ***a***＝*Ø*＝*ki*
だから APASS - 恐れる さえ NEG IND.A＝3.O＝する
「私達（私とお前と彼／彼女／彼ら／彼女ら）は、神様のお陰で、高い所にいたので、そのような、恐ろしい思いはしなかった。」文字通りには「…（洪水）の危険を恐れなくてすんだ」（T3 50）

（19）a. ***aoka*** *yaykata* ***a***＝*Ø*＝*kar* *ruwe?*
IND 自身 IND.A＝3.O＝つくる INF.EV
「お前が自分でそれをつくったのか？」文字通りには「人がそれを自分でつくったのか？」）（T4 381）

b. *ku*＝***i***＝*nukar* *rusuy* *korka*
1SG.A＝IND.O＝会う DESID しかし
「私があなたに会いたかったけれど」文字通りには「私は人と会いたかった」）（T4 381）

（20）a. “［***aoka***］*oya-pa* *suy* *arki*＝***an*** *kusu* *ne* *na!*” *sekor*
IND.PL 次の - 年 再び 来る.PL＝IND.S 意図 COP FIN QUOT
Ø＝*haweoka kor* *Ø*＝*paye* *wa* *orano* *k*＝*Ø*＝*okaramotte-pa*
3.S＝言う.PL ながら 3.S＝行く.PL そして それから 1SG.A＝3.O＝名残惜しく思う -PL
「「来年また来るから！」と言いながら行ってしまったので、（私は彼らを）名残惜しく思う（みな）。」」文字通りには「自分たちは来年にまた来る！」（T2 31）

b. “***asinuma*** *arpa*＝***an*** *kusu* *ne*” *sekor* *Ø*＝*hawean*
IND.SG 行く.SG＝IND.S 意図 COP QUOT 3.S＝言う.SG
「「私が行きます」と（彼は）言った。」文字通りには「自分が行きます！」（T2 31）（グロスは筆者による）

ほかの方言とは異なり、北海道南部方言は、logophoric な単数形の代名詞 ***asinuma***[22]「人、誰か」を発達さ

せた（田村 1988: 22–24）。動詞では、本来単数ではない同じ不定人称の標示 ***a***＝（A）、＝***an***（S）、***i***＝（O）が現れる。中川（1988: 246）によれば ***asinuma*** は、もともと単数ではない標示を持った動詞形が単数形と再解釈されたために生まれたものである（すなわち、指示対象が単数の場合に、本来の *paye＝an*［行く.PL］の代わりに *arpa＝an*［行く.SG］が使われるようになった）。これは北海道のほかの方言の資料を見れば明らかである。

logophoric な機能は、例（21）のように、物語のなかの主人公を指すのに一般に用いられる形である。これは、物語は全体が引用であり、それを報告するという構造になっているためである。

（21）“…*cis＝**an**,　cis＝**an**　kor　patek　an＝**an**　ayne,…*
泣く＝IND.S　泣く＝IND.S　（し）つつ　だけ　存在する.SG＝IND.S（した）
ray＝an　ma　isam　ruwe　ne”　sekor,　sine menoko　Ø＝itak
死ぬ.SG＝IND.S　て　存在しない　INF.EV　COP　QUOT　一　女　3.S＝言う
「「…私（自分）は泣きに泣いた。私（自分）はいつも泣いていた。そして、結局、私（自分）は死んだ」と、一人の女が言った。」（AB 200）

初期の研究（金田一 1993［1931］、知里 1974［1936］、久保寺 1977）では、フォークロア、とくにユーカラ（英雄叙事詩）のなかで一貫して不定人称が用いられるのは、物語というジャンルの特殊な文体のせいであると考えられ、アイヌ語の口承文芸はすべて「1 人称文学」であるとされた。不定人称の使用をフォークロアの文体に関係づける説を否定し、北海道南部方言（沙流）の口語アイヌ語での logophoric な用法を最初に報告したのは田村である。ほかの方言については、記述的な資料が乏しいために、口語アイヌ語の logophoric な用法が近年まで報告されていなかった。しかし Bugaeva（2008a: 51）は、北海道中央部の方言のひとつである旭川方言（北海道北東部）において、フォークロアではないテキストのなかで logophoric な不定人称形が用いられていることを指摘した。これは、北海道南部方言と同様に、フォークロアのなかでの不定人称の使用が logophoric な理由によるものであることを示している。logophoric な用法は、不定人称のほかの機能との歴史的な関係を強調するために、グロスでは一貫して「不定」とするが、翻訳では「私」とした。

4.2　周辺的な統語機能の標示

すでに述べたように、動詞の項には格標示は現れない。格標示は周辺的な統語機能を持つ名詞句、すなわち付加詞 adjuncts にのみ見られる。付加詞には次の後置詞のいずれかが付く：場所格 *ta*「に」、方向格 *un*「へ」（無生の目標物）、与格 *e-un*「へ」（< 頭 -dat）（有生の目標）、奪格 *wa*「から」、具格 *ani*「で」、共格 *tura*/*tura-no*「と（一緒に）」、通格 *peka*「を（通る、行く）、のあたりで」、変格 *ne*「…として」。これらのほとんどは動詞起源であることが明らかである。*e-un*、*ani*、*tura*/*tura-no* は、しばしば名詞を伴わずに用いられ、文法化の初期的な段階にある。例（22）で、*ani*「と一緒に」（< *ani*「手に持つ」）の前の *itanki* は容易に省略することができ、その場合、「（その椀を）持って」というゼロ照応の解釈になる。もしここで *ani* が動詞であるとすると、*ani* のあとに等位接続をする接続詞が必要であるが、ここでは接続詞は不要である。このことは、*ani* が動詞と後置詞の中間的な特徴を持つことを意味している。

（22）*itanki　huraye　hine　（itanki）**ani**　Ø＝i＝ko-i-puni*[23]
椀　洗う　て　椀　INST　3.A＝IND.O＝to.APPL-APASS- 上げる
「彼女は椀を洗い、それで私に食べものを出した」（OI）

場所格 ***ta***、方向格 ***un***、与格 ***e-un***、奪格 ***wa*** の例を示す。静的な位置は例（23）のように場所格で示される。

(23) *apa sam* ***ta*** *a＝an*
扉　近く　LOC　坐る.SG＝IND.S
「私は扉の近くに坐った」(K7803232UP.035)

目標物は例（24a）のように方向格 ***un*** で示されるが、例（24b）のように場所格 ***ta*** を用いることも可能。場所格の場合、そこへの到着が意味されるようである。例 (25) の ***e-un*** は有生の目標を標示するのに用いられ、「与格」と呼ぶことにする。

(24) a. *sine-an-ta* …*kuca* *or* ***un*** *arpa＝an*
一 - ある.SG-LOC…狩小屋　所　all　行く.SG＝IND.S
kunak *a＝Ø＝ramu* *kusu,*
と　IND.A＝3.O＝思う だから
「ある日、どこかの狩小屋に行こうと思ったので」(K8109171UP.010)
b. *kuca* *or* ***ta*** *arpa＝an* *ine* *inaw-roski＝an*
狩小屋　所　LOC　行く.SG＝IND.S　て　イナウ - 立てる.PL＝IND.S
「狩小屋に行って、イナウを立てたりして、」(K8106233UP.007)
(25) *ne* *wen-kur okkay-po* ***eun*** *anak-ne iteki* *arpa＝an* *yak* *pirka*
この／あの　貧乏人　男 -DIM　DAT TOP-COP　PROH　行く.SG＝IND.S　もし　良い
「あの貧乏人の若者のところへは、決して行ってはいけないぞ。」(K7803232UP.099)

出所は、例（26a）のように奪格 ***wa*** で標示される。(26b) のように、本来の不定 indefinite proper（＝非人称受動）において、降格された動作主を表すのにも奪格が用いられる（詳細は Bugaeva 2011b: 527-8)。(17a) も同じ構文であるが、動作主を示す斜格の名詞句を欠いている。

(26) a. *nisat-ta* *tunas-no* *tan* *kotan* ***wa*** *k＝arpa* *kusu* *ne* *na*
夜明け - に　早い -ADV　この　村　ABL　1SG.S＝行く.SG　意図　COP　FIN
「明日早くこの村を出発するつもりです。」(KS #0053)
b. *hapo* *or-o* ***wa*** *a＝en＝koyki*
母　所 -POSS　ABL　IND.A＝1SG.O＝叱る
「私は母親から叱られた」(T2 72) 文字通りには「母から人が私を叱った」

ほとんどの名詞は、場所格 ***ta*** や場所を表す後置詞を直接伴うことができない。名詞と後置詞のあいだに、特定の意味を持たない *or* (*-o*)「(…の) 所」(例 (24)、(26b))、あるいは特定の意味を持つ、*sam* (*-a*)「(…の) 近くに」(例 (23)) などのような、特別な関係名詞 (3.1 節) が現れなければならない[24]。一部の普通名詞 (*kotan*「村」(例 (26a))、*kim*「山々」、*pis*「浜」、*rep*「海」、*ya*「岸」、*put*「河口」など）と地名は、関係名詞を必要としない。田村（1984: 39-40）では、関係名詞を必要とするものをモノ名詞、関係名詞を必要としないものを位置名詞と呼んでいる。

4.3　名詞句の構造

名詞はそれに前置される修飾語／句を伴って、名詞句の主要部となることができる。修飾語／句として、限定詞（数量限定詞、あるいは名詞的／照応指示詞)、副詞、名詞、所有者名詞句、関係節がある（[限定詞＋主要部名詞］という構造については 3.3 節を参照)。

［副詞＋主要部名詞］のタイプは稀である（例 (27))。

(27)　*teeta*　*huci*
　　大昔　老婆
　　「昔のおばあさん」（曾祖母たちやそれより昔の世代）（T2 74）

［名詞＋主要部名詞］は修飾構造であり、修飾語と主要部名詞句が並置される（例（28））。

(28) a.　*sísam*　*uwepeker*
　　和人　昔話
　　「日本の昔話」

b.　*kamuy rus*
　　熊　　皮
　　「熊の毛皮」（T2 33）

［所有者名詞＋主要部名詞］は、主要部標示型の構文である。所有者名詞句の位置には名詞あるいは代名詞が現れる。主要部名詞（被所有者）には、所有者の人称・数を示す A 系列の接頭辞が付く。主要部名詞にはさらに、所有接尾辞 *-hV* / *-V*（*hV*）が付く。これは、語根末の母音をコピーし、/*h*/ を挿入するもので、語根が母音で終わる場合には *-ha*/*-hu*/*-ho*/*-he*/*-hi*（例（29a））、語根が子音で終わる場合には *-a*（*ha*）/*-u*（*hu*）/*-o*（*ho*）/*-e*（*he*）/*-i*（*hi*）（例（29b））となる。ただし、*w* または *y* で終わる語根では常に *-ehe*（例（29c））。一部の例外的な名詞では、末尾の音素にかかわらず *-ihi*（まれに *-oho*/*-uhu*）となる（例（29d））。所属形の「短い」形式（例：*ci*＝*setur-u*）と「長い」形式（*ci*＝*setur-uhu*）の違いは明らかではない。被所有者を表す名詞には所有者が義務的に標示されるので、代名詞は所有者名詞句として普通は現れない（例（29a-c））。所有者名詞句が代名詞以外の名詞の場合も、文脈上明らかであれば省略される。

(29) a.　*ku*＝*sapa*-***ha***
　　1SG.A＝頭 -POSS
　　「私の頭」

b.　*ci*＝*setur*-***u*(*hu*)**
　　1SG.EXC.A＝背中 -POSS
　　「我々の背中」

c.　*e*＝*haw*-***e*(*he*)**
　　2.SG.A＝声 -POSS
　　「お前の声」

d.　*kamuy*　*Ø*＝*rus*-***i*(*hi*)**
　　熊　　3.A＝毛皮 -POSS
　　「熊の毛皮」

北海道南部方言では、このような構文は、主要部名詞が体の部分や排泄物、力、感情、親族名詞、全体に対する一部などを表す、いわゆる譲渡不可能所有の場合にのみ用いられる。田村（1988: 33-34）によれば、所有者が特定であれば所属形が用いられなければならない。そのため、(29d) は「きのう、我々が殺した熊の［毛皮］」というような場合にも可能であるが、(28b) は「どの熊でもない、熊一般の毛皮「熊の毛皮なるもの」」である。Satō（1997: 150-53）は田村の説に反論し、所有者が不定であるのに所属形が使われている例を提示し、所属形の使用は所有者の無標の話題化（unmarked topicalization）によって条件づけられるという説明を試みた。

(30)　*aynu*　*opitta*　*hon-ihi*　　*kor*　*wa*　*okay*　*pe*　*ne*　*wa*
　　man　all　belly- 所属　have　and are　thing　be　FP
　　‘Human beings all have a belly.’［全ての人間はお腹がある］（グロスと英訳は Satō 1997 によるもの）

筆者は田村の説明が基本的に正しいと考えている。所有者が定である場合に所有接尾辞が現れやすい。しかし、決定的な条件は、所有が定であるかどうかではなく、文脈上、その関係が所有関係であるか（例（29d））、単なる修飾関係であるか（例（28b））である。どちらか一方の解釈しかできない場合も多いと思われる（例（30））。

北海道南部方言における譲渡可能所有は、所有者を主語、動詞 *kor*「持つ」を述語とする、関係節にもとづいた迂言的な構造によって表現される。被所有者は無標の形式で現れる。

(31) [*ku*＝*Ø*＝*kor*]　　*kamuy*
1SG.A＝3.O＝持つ　　神
「私の神」文字通りには「私の持っている神」)(OI)

[関係節＋主要部名詞] について、田村 (2000 [1988]: 188) は動詞と節とで修飾する要素を区別しているが、筆者はどちらも関係節であると考える。いずれも動詞として、すべて項の人称・数についての標示を義務的に伴い、節の述語となるためである。関係節の述語は定形 (finite) であるが、主節で動詞の後に現れる終助詞 *na* / *wa* / *so* を伴うことはできない。動詞の項は gap strategy によって関係節化される (関係代名詞や再述代名詞 (resumptive pronouns) は用いられない)。動詞の項以外の名詞句や所有者の関係節化は、格標示の保持などの特別な手段を用いてのみ可能である。これは、斜格名詞句の一部も gap strategy によって関係節化する日本語とは異なる手段で、もとの格関係を理解しやすくするものである。「比較の対象」(object of comparison) を除き、Keenan & Comrie (1977) の唱えた階層のすべての位置を関係節化することができる：SU > DO > IO > OBL > GEN > OCOMP。

SU ―自動詞主語 S の関係節化

アイヌ語は、行為者的な主語 (例 (32a)) と非行為者的な主語 (例 (32b)) を、関係節化において区別しない。

(32) a. [*cise*　*soy*　*pak-no*　　*Ø*＝*arki*]　　***utar***　*anak-ne*
家　外　まで -ADV　3.S＝来る.PL　人々　TOP.COP
a＝*Ø*＝*ahun-ke*　　*yak*　*pirka*　*wa*
IND.A＝3.O＝入る.SG-caus もし　良い　FIN
「家まで来た男たちは、入れてもよい」(AB 95)
b. [*Ø*＝*pirka*]　　***menoko***　*a*＝*Ø*＝*etun*
3.S＝良い／美しい　女　　IND.A＝3.O＝娶る
「私は美しい女を娶った」(AB 94)

SU ―他動詞主語 A の関係節化

A の関係節化は稀である (例 (33))。

(33) [[*anrur*　*Ø*＝*Ø*＝*un*]　　*kamuy*　*Ø*＝*Ø*＝*ray-ke*]　　***kur***
アンルル　3.A＝3.O＝属する　神／熊　3.A＝3.O＝死ぬ.SG -CAUS　男
「西浦 (アンルル) の神を打ち取らん者は」文字通りには「アンルルに属する熊を殺した男」(KI 292)

DO ―目的語 O (2 項動詞の被動作主) の関係節化。

(34) [*toan-i*　*un*　*ku*＝*Ø*＝*nukar*]　　***cise***　*hemanta*　*Ø*＝*an?*
あの - 場所　ALL　1SG.A＝3.O＝見る　家　何　3.S＝ある.SG
「あそこに見える (＝私が見ている) 家は何ですか？」(KS #3347)

IO ―間接目的語 O (3 項動詞の受け手) の関係節化

(アイヌ語では直接目的語と間接目的語は形式的に区別されない。)

(35)　[*kampi*　*a*＝*Ø*＝*e-pakasnu*]　***hekattar***
紙／手紙　IND.A＝3.O＝about.APPL - 教える　子供たち
「(学校へ行って) 読み書きを教わる子供たち」(KS #1237)

OBL ―斜格名詞句の関係節化

諸言語で一般に斜格名詞句によって表現されるような関係は、アイヌ語では適用態の直接目的語として現れ(4.4.1.1 節を参照)、gap strategy によって関係節化される。

(36)　[*katkemat*　*a*＝*Ø*＝***e-hotke***]　***usi***　*Ø*＝*Ø*＝*kar*　*wa*
婦人　IND.A＝3.O＝at.APPL　場所　3.A＝3.O＝つくる　そして
Ø＝*i*＝*kor-e*
3.A＝IND.O＝持つ -CAUS
「婦人は私に寝床 (＝私が横になる場所) を支度してくれた」(AB 400)

(適用態の目的語ではない) 純粋な斜格名詞句は、関係節化された名詞句の格役割が分からなくならないように、格関係を保ったまま特別な方法で関係節化される。たとえば例 (37) では具格の後置詞 ***ani*** が、例 (38) では共格の後置詞 ***tura-*** (***no***) が関係節のなかに残っている。

(37)　[***ani***　*ku*＝*yupo*　*kamuy*　*Ø*＝*Ø*＝*tukan*]　***teppo***
INST　1SG.A＝兄.POSS　熊／神　3.A＝3.O＝撃つ　銃
「私の兄が熊を撃った銃」(AB 95)
cf. もとの構文：
teppo　***ani***　*ku*＝*yupo*　*kamuy*　*Ø*＝*Ø*＝*tukan*
銃　INST　1SG.A＝兄.POSS　熊／神　3.A＝3.O＝撃つ
「私の兄は銃で熊を撃った」
(38)　[***tura-no***　*ku*＝*yupo*　*kamuy*　*Ø*＝*Ø*＝*cotca*]　***acapo***
COM-ADV　1SG.A＝兄.POSS　熊／神　3.A＝3.O＝撃つ　叔父
「私の兄が一緒に熊を撃った叔父」(AB 96)
cf. *acapo*　***tura-no***　*ku*＝*yupo*　*kamuy*　*Ø*＝*Ø*＝*cotca*
叔父　COM-ADV　1SG.A＝兄.POSS　熊／神　3.A＝3.O＝撃つ
「私の兄が叔父と一緒に熊を撃った」

関係節内での場所格の助詞を伴った関係名詞の保持。4.2 節で述べたように、アイヌ語の名詞の多くは、***or*** (***-o***)「(…の) 所」などの関係名詞なしでは場所を示す句として現れることができない。そのため、例 (39) のように、場所格の後置詞を伴って ***or-o*** が所属形で関係節のなかに残る。日本語の連体修飾節における再述代名詞 (resumptive pronoun) に相当するものとして、指示詞との類似性を認めることができる (Tsunoda forthcoming)。

(39)　[***or-o***　***ta***　*cep*　*poro-n-no*　*Ø*＝*hemesu*]　***pet***
場所-POSS　LOC　魚　たくさんの -EP-ADV　3.S＝遡上する　川
「たくさんの魚が遡上する川」(AB 96)
cf. *pet*　***or***　***ta***　*cep*　*poro-n-no*　*Ø*＝*hemesu*
川　場所　LOC　魚　たくさんの -EP-ADV　3.S＝遡上する
「川でたくさんの魚が遡上する」

GEN ―所有者の関係節化（譲渡不可能所有の場合のみ）

所有者の存在を示唆するべく、被所有者を表す名詞は所属形のまま残る。

(40) ［*sara-**ha*** *Ø＝tanne*］***seta***
尾-POSS 3.S＝長い 犬
「尾が長い犬」（OI）
cf. *seta* *sara-**ha*** *Ø＝tanne*
犬 尾-POSS 3.S＝長い
「犬の尾が長い」

関係節の主名詞は、例（32）、（33）、（36）のように、拘束名詞（3.1 節）であることが最も多い。

このほか、例（41）のような、興味深いタイプの名詞修飾構造[25]がある。このような構造は、主名詞が動詞の項や付加詞として現れるような、対応する関係節ではない構造が存在しないので、関係節としては分析できない。類似したタイプの構造は日本語にも存在する（寺村（1992: 192-205）の言う「外の関係」としてよく知られており、Matsumoto（1997）が詳細に分析している）。このような構造がアイヌ語に存在することは最近になって明らかなった（Bugaeva & Matsumoto 2009）[26]。

(41) ［*e＝munin*］ *Ø＝hura*
2SG.S＝腐る 3.A＝臭い.POSS
「お前の腐った匂い」文字通りには「お前が腐っている臭い」）（N 338）

4.4 動詞句の構造

4.4.1 動詞の形態的構造：結合価の変化

福田（田村）（1955: 55）によれば、動詞には 6 つの形態的なスロットがある（表 4）。(I) 適用態 ***e-***/***ko-***/***o-***；(II) 相互 ***u-***、再帰 ***yay-***/***si-***、一般化された目的語 ***i-***；(III) 適用態 ***e-***/***ko-***/***o-***（これは同時に 2 つ現れることが可能）；(IV) 単数／複数を示す接尾辞；(V) 他動詞／自動詞を示す接尾辞；(VI) 使役 ***-re***/***-e***/***-te*** と ***-yar***（/***-ar***）。

表 4 アイヌ語沙流方言の動詞の構造（福田（田村）1955: 51）
（変更を加えた箇所は［ ］で示す）

<table>
<tr><th colspan="6">人称語幹</th></tr>
<tr><th>I</th><th>II</th><th>III</th><th>0</th><th>IV</th><th>VI</th></tr>
<tr><td rowspan="2">e-［適用態］
〈で以て［／について／で］〉</td><td>i-［逆受動］
〈ひとを、に；ものを、に〉</td><td rowspan="2">e-［適用態］
〈で以て［／について／で］〉</td><td rowspan="4">語基</td><td>単数形形成接尾辞
または
複数形形成接尾辞</td><td rowspan="2">使役形形成接尾辞
［使役］
-re/-e/-te
させる</td></tr>
<tr><td>yay-［再帰］
〈自分を、に〉</td><td>V</td></tr>
<tr><td>ko-［適用態］
〈に対して〉</td><td>u-［相互］
〈互いを、に〉</td><td>ko-［適用態］
〈に対して〉</td><td rowspan="2">自動詞形成接尾辞
または
他動詞形成接尾辞</td><td rowspan="2">［不定］
-yar［/-ar］［使役］
〈ひとにさせる〉</td></tr>
<tr><td>［o- 適用態
〈（ひと）のところへ／で〉］</td><td>si-［A 使役］
〈自分を、に〉</td><td>［o- 適用態
〈（場所）へ／で〉］</td></tr>
</table>

人称語幹は語基のみ、あるいは語基に 1 つ以上の接辞が付いた形で構成される。IV 以外のすべてのスロットは結合価の変化（あるいは広義の「態」）に関与するので、ここで説明する。ただし、表 4 は逆使役を欠き、2 つの使役接尾辞しか示していないので、幾つかの重要な変更を加える。形式の統語と機能に基づき、次の変

更を提案する。

・スロット II の ***si-***「自身」は、「逆使役／再帰」とする。
・スロット V の他動詞／自動詞を示す接尾辞は、逆使役を示す ***-ke*** と直接使役 ***-V***、***-ke***、***-ka***、***-re***/***-e***/***-te*** である。
・スロット VI の使役 ***-re***/***-e***/***-te*** は、間接使役 ***-re***/***-e***/***-te*** とする。

また、名詞の抱合についても説明を加えなければならない。抱合された名詞は、語基（0）の直前あるいは、適用態のスロット（I ／ III）の前に入る。

要約すると、結合価を増やすものとして、適用態 ***e-***、***ko-***、***o-*** と使役[27] ***-re***/***-e***/***-te***、***-ka***、***-ke, -V*** の 2 つがある。結合価を減らすものとしては、再帰 ***yay-***、***si-***、相互 ***u-***、逆受動 ***i-***、逆使役 ***si-***、***-ke***、名詞抱合の 5 つの操作がある。6 つのスロットすべてに同時に形態素を持つような動詞形は見つかっていない。例（42）のように、同時にいくつかの派生を伴うさまざまな可能性がある。

（42）a. *ruska*「…に怒る」　（他動詞）
b. ***ko-****ruska*　〈APPL-…に怒る〉
「…のことで…に怒る」（OI）　（複他動詞）
c. ***yay-ko-****ruska*　〈REFL-APPL-…に怒る〉
「自分自身に…の理由で怒る」（OI）　（他動詞）
d. ***i-****ruska*　〈APASS-…に怒る〉
「怒る」（OI）　（自動詞）
e. ***ko-i-****ruska*　〈APPL-APASS-…に怒る〉
「…に怒る」（OI）　（他動詞）
f. ***si-ko-i-****ruska*　〈ACAUS-APPL-APASS-…に怒る〉
「怒る」（cf.「誰かに怒る」）（B 453）　（自動詞）
g. ***i-****ruska****-re***　〈APASS-…に怒る-CAUS〉
「…を怒らせる」（OI）　（他動詞）
h. ***ko-i-****ruska****-re***　〈APPL-APASS-…に怒る-CAUS〉
「…に対して…を怒らせる」（OI）　（複他動詞）
i. ***si-ko-i-****ruska****-re***　〈ACAUS-APPL-APASS-…に怒る-CAUS〉
「自分自身に怒らせる」（KI1 243）　（他動詞）
j. ***u-ko-i-****ruska*　〈REC-APPL-APASS-…に怒る〉
「お互いに怒る」（OI）　（自動詞）
k. ***u-ko-i-****ruska****-re***　〈REC-APPL-APASS-…に怒る-CAUS〉
「…の理由で…をお互いに怒らせる」（OI）　（他動詞）
l. ****u-****ruska*　〈REFL-…に怒る〉
（これは（a）が人間を指示する O を持たないので、非文法的になる）（OI）　（自動詞）

4.4.1.1　適用態

一般に適用態の構文では、意味的に周辺的な項あるいは付加詞が中心的な項、つまり目的語になり、この統語的操作が動詞に明示的な標識により示される（Peterson 2007: 1）。アイヌ語を含む多くの言語では、適用態は語用論的に重要な機能を持つ。すなわち、「構文が指示する対象は、そのような構文でない場合に較べて、談話においてより重要（salient）である（前景化された（foregrounded）情報）か、あるいは継続的な話題である」（Peterson 1999: 61；Peterson 1999 は Givón 1983 を参照している）。

アイヌ語の適用態は ***e-***, ***ko-***, ***o-*** によって派生される。これらの接頭辞は結合価を増やすが、意味的な機能は常に一定ではない。構文はいくつかの意味を表すことがあり、実際の意味は接頭辞の意味と動詞との相互作用によって決まる。コーパスを基にした研究によれば、***e-*** は内容、場所、道具、対象（theme）、理由／目的、その他（共同の動作主、様式、受益者、経路）を、***ko-*** は目標、受け手／受益者、共同の被動作主、迷惑の出所、その他（理由／目的）を、***o-*** は目的、場所、を表す（Bugaeva 2010a: 760）。

Bugaeva（2010a）では、適用態として、道具 ***e-***、与格 ***ko-***、場所 ***o-*** の 3 種類を規定した。そのほかのほとんどの意味は、「原」役割（proto-role）との関係で説明することができるためである。

これらの接頭辞は自動詞を 2 項動詞に変える。例（43a）で S を示す接辞＝***an*** は、（43b）では対応する A の接辞 ***a***＝に変わっている。また、***ta-*** で示される付加詞は目的語に昇格されている。

（43）a. *casi* *upsor* ***ta*** *ahun*＝***an*** *ruwe* *ne*
城 内 loc 入る.SG＝IND.S INF.EV COP
「私は城のなかに入った」（OI）

b. *casi* *upsor* ***a***＝*Ø*＝***o-****ahun* *ruwe* *ne*
城 内 IND.A＝3.O＝to.APPL-入る.SG INF.EV COP
「私は城のなかに入った」（OI）

2 項動詞は適用態により 3 他動詞になり、無標の目的語を 2 つ持つようになる。標示やふるまいの点で、2 つの目的語のあいだの違いはほぼ無い[28]。原則として、1・2 人称であれば、いずれの目的語も動詞に標示されうる（ただし、一度にはどちらか一方のみ）。実際には、動詞に標示されるのは、たいてい受け手を表す目的語である。受け手はたいてい有生であり、1・2 人称の指示対象を持つことがあるのに対し、対象 theme や道具を表す目的語はたいてい無生であるためである。

（44）a. ［*e*＝*matak-i*］$_{P}$… ［*nea* *mat-ikor*］$_{INST}$ ***ani*** *a*＝*Ø*＝*resu*
2SG.A＝妹-POSS その 女 - 宝 INST 3.A＝3.O＝育てる
「私はその宝物でお前の妹を育てた」（K8109193UP.088 に変更を加えたもの）

b. ［*matkaci* *anak-ne*］$_{P}$ ［*nea* *iskar* *emko* *Ø*＝*Ø*＝*kor* *katkemat*
少女 TOP-COP その 石狩 半分 3.A＝3.O＝持つ 女
Ø＝*Ø*＝*kor* *mat-ikor*］$_{INST}$ *a*＝*Ø*＝***e-****resu*
3.A＝3.O＝持つ 女 - 宝 IND.A＝3.O＝with.APPL- 上げる
「女の子は、あの石狩上流の奥さんの女の宝物を与えて育てた。」文字通りには「女の子は、石狩上流の出の女からもらった宝物で（その宝物の力を利用して）私が育てた」（K8109171UP.100）

適用態は典型的には、対応する意味・統語的に周辺的な対象が斜格名詞句として現れる構文を持つ。すなわち、対応する適用態ではない構文が存在しなければならない。また、動作主と対象／被動作主は周辺的な対象ではないので、適用態の操作には関係しないはずである。動作主が追加される場合は使役化になる。対象／被動作主が追加される場合は非使役的な他動詞化になる。アイヌ語はしばしば典型的な適用態構文を持つ言語のひとつに数えられるが（Spencer 1991: 253）、実際にはアイヌ語の適用態の大部分は典型的な例からは大きく外れる。対応する適用態でない構文が存在しなかったり（***e-***（内容、対象）と ***ko-***（受け手）の適用態）、対象の意味役割を持つ対象が追加される例（***e-*** 適用態）があるためである。例（45b）にはその両方の特徴が現れている。

（45）a. *ainu* *or* *un* *iteki* ***i****kka* *yan*
アイヌ 場所 で PROH 盗む IMP.POL

「人間のところへ（行って）決して物を盗むではないぞ。」（KI 117）

b. *a*＝*e*＝***e-ikka*** *hene* *a*＝*e*＝*ray-ke* *yak-ka*
IND.A＝2.SG.O＝APPL-盗む そして IND.A＝2.SG.O＝死ぬ.SG-CAUS（すれ）ば - も
「さらわれて、殺されたとしても…」（K7908032UP）

例（45b）のような対象が関与する適用態は、通言語的にきわめて稀である。筆者は、このような構文は、道具の適用態に起源を持ち、3 項文の枠組みに基づくものであると考える。実際には、対象が関与する適用態のほとんどは、名詞抱合、あるいは結合価を減らす逆受動 ***i-*** ／逆使役 ***si-*** を含む派生自動詞からつくられる。そのような派生自動詞は、（45a）の ***ikka***「盗む」のように、化石化していることが多い。

適用態の一部については、対応する非適用態の構文の存在が報告されているが、実際のテキストではそのような構文はほとんど用いられない。たとえば、与格の適用態 ***ko-*** は、原則的に、与格 ***eun*** による言い換えが可能であるはずである。与格 ***eun*** は、受け手、有生の目標などを表す斜格の対象を標示する。しかし、与格 ***eun*** が用いられる構文はテキストでは稀である。というのも ***eun*** は、対応する受け手を項とする適用態が、何らかの理由で存在しない少数の動詞（たとえば、*se*「背負って運ぶ」、*ye*「伝える」）で用いられるのが普通である。***ko-*** による受け手を項とする適用態が存在する場合、テキストにおいて例（46a）のような ***eun-*** を含む構文が現れる可能性は低い。もし、例（46b）のように、受け手が代名詞の項として標示される場合には、***eun*** を含む構文は決して用いられない。最後の世代の話し手たちは、日本語の影響で、対応する非適用態の構文を多用する傾向があるようである。

（46）a. [*aynu* *Ø*＝*nimar-a*]$_{A}$ [*iskar emko* *Ø*＝*Ø*＝*kor* *nispa*]$_{R}$ ***eun***
人間／アイヌ 3.A＝半分 -POSS 石狩 上流 3.A＝3.O＝持つ 長者 DAT
[*nea* *nispa* *Ø*＝*Ø*＝*kor* *pa* *p*]$_{T}$ *opitta* *Ø*＝*Ø*＝*rura* *pa*
その 長者 3.A＝3.O＝持つ PL NMR すべて 3.A＝3.O＝運ぶ PL
「残った半分の人たちは、石狩上流の長者の家へ、その長者の持っていたものを全部運んだ。」（K8109171UP.234）

b. *aynurakkur* *kamuy* *a*＝*karku* *Ø*＝*an* *kusu-keray-po*
アイヌラックル 神 IND.A＝甥.POSS 3.S＝存在する.SG なぜなら - おかげで -DIM
[*a*＝*Ø*＝*kor* *tures-i*]$_{T}$ *a*＝*i*$_{R}$＝***ko-rura***
IND.A＝3.O＝持つ妹 -POSS IND.A＝IND.O＝to.APPL- 運ぶ
「アイヌラックル我が甥の御蔭にて我が妹送り帰されて来れるたり」文字通りには「私の神聖な甥アイヌラックルのおかげで、私の妹は私のところに運ばれてきた」（KI 267）

適用態についての類型的研究の多く（たとえば Peterson 2007）は、適用態を（周辺的な）項を導入するための選択肢のひとつとして扱っているが、アイヌ語の適用態はしばしばそれが**唯一の**方法なのである。

また、Shibatani（1990: 66）が指摘するように、いわゆる非対格自動詞から ***e-*** や ***ko-*** による適用態がつくられることも、類型的に稀な特徴である。GB の枠組み（Baker 1988: 254）では、自動詞の一部、すなわち非対格動詞は、適用態の形成についての制限を受けると主張されている。非対格動詞とは、Perlmutter（1978）の非対格仮説が示したように、深層構造で目的語として現れる主語（run、work などの非能格動詞に対比されるものとして fall、die など）を持つ動詞である。実際に、アイヌ語では、以下のタイプの非対格動詞から適用態を派生することができる。ただし、内的な理由による状態変化を表す動詞（internally caused verbs of change of state）からは適用態をつくることはできない。

（i） <u>状態変化を表す動詞</u>

（47）a. ***e-sik***「…でいっぱいである／になる」（T 123）（道具）< *sik*「いっぱいである／になる」

b. ***ko-****onne*「…とともに歳をとる／暮らす」（共同の被動作主）＜*onne*「歳をとる」
c. ***o-****rer*「…に沈む」（場所）＜*rer*「沈む」

(ii) 方向性を持った移動を表す動詞

(48) a. ***e-****ek*「…（する）ために来る（SG）」（目的）＜*ek*「来る（SG）」
e-*san*「…に降りる（SG）」（KI 518）（場所）＜*san*「降りる（SG）」
e-*sirepa*「…に着く」（B 133）（場所）＜*sirepa*「着く」
b. ***ko-****ek*「（人）のところに来る（SG）」（目標）＜*ek*「来る（SG）」
ko-*hemesu*「…に登る」（目標）＜*hemesu*「登る」
ko-*hokus*「…と一緒に落ちる」（共同の被動作主）＜*hokus*「落ちる」
ko-*yan*「（人）のところに上る（単数）」（目標）＜*yan*「上る／上陸する（SG）」
c. ***o-****ek*「（人）のところに来る（SG）」（目標）＜*ek*「来る（SG）」
o-*hemesu*「…に登る」（目標）＜*hemesu*「登る」
o-*yan*「…に登る（SG）」（目標）＜*yan*「登る／上陸する（SG）」

(iii) 存在・出現を表す動詞

(49) a. ***e-****an*「…に暮らす／存在する（SG）」（T 71）＜*an*「暮らす／存在する（SG）」
e-*isam*「…で死ぬ」（T 167）（場所）＜*isam*「存在しない、死ぬ」
e-*ray*「…で死ぬ」（N1 99）（場所）＜*ray*「死ぬ（SG）」
e-*rok*「（神が）…に住む」（T 120）（場所）＜*rok*「坐る（PL）」
ko-*rewsi*「（人）とともに夜を明かす」（共同の被動作主）＜*rewsi*「留まる」
b. ***o-****rewsi*「…で夜を明かす」（T 481）（場所）（他動詞）＜*rewsi*「留まる」
o-*sirepa*「…に着く」（N 117）（場所）＜*sirepa*「着く」

ただし、アイヌ語でこれらの動詞が本当に非対格動詞であるのかはこれまで充分に示されていない。Bugaeva（2010a: 787）において、筆者は、これらの動詞が限界性（telicity）について非対格動詞の特徴を持つことを示した。しかし、非対格性の重要な特徴である「動作主性」の程度を確認する手段がアイヌ語にないために、これらの動詞が完全に非動作主的であるとは言えないかもしれない。

さまざまなタイプのテキストでの適用態の使用についても述べておかねばならない。Refsing（1986: 32）が述べたように、適用態の構文は、1920／1930 年代に金田一や知里が収集したテキストにはきわめて頻繁に現れるが、それに較べて、彼女が 1980 年代に収集した資料でははるかに少ない。彼女が調査を行なった話し手[29]は、後置詞による表現を好んだ。これを、彼女は日本語の影響によるアイヌ語の衰退の兆候であると考えた。しかしながら、言語接触に起因する変化が影響した可能性があるとしても、それが唯一の理由ではないかもしれない。金田一（1993［1931］）や知里（1974［1936］, 1973［1942］）の文法は、アイヌ語の口承文芸のテキスト、主にユーカラ（英雄叙事詩）やカムイ・ユーカラ（神謡）の韻文テキストの研究に基づいたものである。そのようなテキストでは、複統合性の程度の高い、きわめて洗練された言語が用いられる。それに対して、Refsing の文法は口語アイヌ語に基づいていた。つまり、適用態の頻度の差は、調査対象のテキストのジャンルの違いを反映している可能性がある。アイヌ語の韻文で（単音節の）適用態の形式が非常に頻繁に用いられるのは、単に、それが後置詞を用いた表現よりも、韻律的な条件（一行は 4/5 音節）や歌の旋律に合うためであるかもしれない。口語や散文の口承文芸では、適用態の使用の頻度は低く、それが用いられた場合には、指示対象が談話においてより重要（salient）であることを示すようである。韻文における適用態は、必ずしも適用態が典型的に持つ談話機能を示すものではなく、「真の適用態」とは区別して扱われるべきものである。

4.4.1.2　使役

「一般に、使役構文は、2 つの小事態から構成される複合的な大事態の言語的な表現である。2 つの小事態とは、(i) 別の事態が起こるために使役者が何かを行なう／始める使役的な事態と (ii) 使役者の行為の結果として起こる、被使役者が行為を行なう、あるいは条件・状態の変化を被る事態である」(“The causative construction generally represents a linguistic expression which denotes a complex macro-situation consisting of two micro-situations or component events: (i) the causing event in which the causer does or initiates something in order to bring about a different event (i.e. the caused event) , and (ii) the caused event in which the causee carries out an action or undergoes a change of condition or state as a result of the causer’s action”) (Song (2001: 257)、もとは Nedjalkov & Silnitskij (1969: 5) が提案したもの)。統語的に、使役構文はたいてい A の機能 (使役者) を持つ新しい項を導入して結合価を増やし (ただし、不定使役接尾辞 ***-yar***/***-ar*** は結合価を増やさないので、必ずしも結合価が増えるとは言えない)、もともとの S (被使役者) は新しい他動詞節の O となる。他動詞の使役では、使役者は常に A になり、もとの A (被使役者) と O は新しい統語機能を割り当てられる (Dixon 2000: 31)。

アイヌ語には形態的な使役がいくつかあるが、アイヌ語研究では、生産的な ***-re***/***-e***/***-te*** と不定使役 ***-yar***/***-ar*** のみが使役として扱われてきた (表 4)。しかし、伝統的に他動詞の派生 (スロット V) とされてきた、生産性の低い ***-V***/***-ke***/***-ka*** による派生も、統語的・機能的に上記の使役の定義に合致するので、使役と考えられるべきものである (Bugaeva 2008c, 2010b)。しかし、使役を標示する接辞に応じて、意味的な違いもある。***-V***, ***-ke***, ***-ka*** は直接使役、***-re***/***-e***/***-te*** は直接／間接使役を、***-yar***/***-ar*** は間接使役 (強制的・許可的の両方のタイプ) を表す。

非生産的な語彙的使役 ***-V*** (***-a***/***-e***/***-u***/***-o***/***-i*** のいずれが現れるかは完全に予測できない)、***-ke***、***-ka*** のそれぞれの表す使役の内容は、派生元の動詞の意味により決まる (詳細は Bugaeva forthcoming a を参照)。***-V*** (例 (50a)) はプロセスや状態を意味する 111 の動詞に付く (例：*mos*「目覚めている」→ *mos-**o***「…を目覚めさせる、ゆすぶり起こす」)。***-ka*** は自発的なプロセス／状態、感情、感覚を表す 30 の動詞に付く (例：*uhuy*「燃える」→ *uhuy-**ka***「燃やす」; *iyunin*「痛む」→ *iyunin-**ka***「…を傷つける」)。***-ke*** (50b) は動きやプロセス／状態を表す 10 の動詞に付く (例：*ray*「死ぬ (単)」→ *ray-**ke***「殺す (単)」; *yan*「上陸する (単)」→ *yan-**ke***「上陸させる (単)」。***-V*** と ***-ka*** はまれに他動詞に付くこともあるが、***-ke*** は自動詞にしか付かない。

アイヌ語では、直接使役と間接使役の組み合わせによって派生される二重使役が可能である。すなわち、非生産的な ***-V***, ***-ke***, ***-ka*** と生産的な ***-re***/***-e***/***-te*** (例 (50c))、または、生産的な接尾辞 ***-re***/***-e***/***-te*** を 2 つ重ねることができる。

(50) a. *or-o-wa*　[*caycaye*]$_{Oc}$　*poro-n-no*　*a*＝*Ø*＝*tuy-**e***
そこ -POSS-ABL　小枝　大きい -EP-ADV　IND.A＝3.O＝切る -CAUS$_1$
「それで私たちはたくさんの小枝を切った」(AB 305)

b. *pira hontom*　*a*＝*Ø*＝*ran-ke*　*kor*　[*tus*]$_S$　*Ø*＝*tuy*
崖　中央　IND.A＝3.O＝降りる -CAUS　と　綱　3.S＝切れる
「(小舟が) 崖の中央に落とされたとき、ロープが切れた」(T3 24)

c. [*hat*　*punkar*]$_{Oc}$　*a*＝*e*$_{O2}$＝*tuy-**e-re***　*wa*　*karip*　*a*＝*Ø*＝*kar*
ぶどう　つる　IND.A＝2SG.O＝切る -CAUS$_1$-CAUS$_2$　て　輪　IND.A＝3.O＝つくる
「私はお前にぶどうづるを切らせて、(それで敵を殺すために) 輪を作った。」(K7803233UP.144)

3 項の適用態と同じように、二重使役や 2 項動詞から派生される使役 (例 (51) のような、適用態から派生される使役を含む) は、無標の目的語を 2 つ持つ。2 つの目的語は、標示やふるまいの点で同じような特徴を示す。

(51) a. *arpa*「行く (SG)」→ ***ko-arpa***「…のところに行く (SG)」→ ***ko-arpa-re***「…を…のところに行かせる」(vd)

b. *so-uk*「借りる」文字通りには「借りを負う」→ ***e-so-uk***「…を借りる」（他動詞）→ ***e-so-uk-te***「…に…を貸す」文字通りには「…に…を借りさせる」（語彙化された使役形（2 項動詞））

4.4.1.3 逆受動

逆受動は、もともとの A が S になる構文である（Dixon and Aikhenvald 2000: 9）。しばしば言われるように、能格言語に限定されたものではなく、いかなるシステムの言語においても、目的語の削除（A → S）[30]が明示的に標示される構文は逆受動と考えられる。アイヌ語の逆受動は派生接頭辞 ***i-*** によって標示される。これは O の不定人称の示す ***i-*** を起源とするものである（不定人称の ***i-*** は、さらに、拘束名詞／名詞化詞の ***hi/i***「場所／時／モノ」に遡るかもしれない）。アイヌ語研究では、逆受動は伝統的に、一般化された目的語「（不定の）人／モノ」の標示と呼ばれてきた（田村 1988: 67）。

これは結合価を減少させる構文である。目的語は完全に削除され、斜格名詞句として表現されることもない。2 項動詞の逆受動によって自動詞が得られる。

(52) a. *ora-no* *nani* *úsey* *Ø＝Ø＝kar* *néa* *iwatarap*
それから - 副詞 すぐに 湯 3.A＝3.O＝つくる その 赤ん坊
Ø＝Ø＝huraye *a* *Ø＝Ø＝huraye* *a*
3.A＝3.O＝洗う ITR 3.A＝3.O＝洗う ITR
「それから（妻は）すぐにお湯をわかして、その赤ん坊の体をよく洗って、」（K8109171UP.168）

b. *ontaro* *or* *un* *Ø＝**i-**huraye*
桶 場所 ALL 3.S＝APASS - 洗う
「桶（おけ）（＝たらい）で洗濯する。」（T 218）

3 項動詞の逆受動はかなり稀であるが、可能である。その場合には、例（53b）や（54b）のように、結合価は減少するが、自動詞にはならない。例（53b）や（54b）のように、派生元の 3 項動詞は、たいてい意味的な複他動詞（ditransitive）、すなわちもともとの意味的な枠組みのなかに対象（T）と受け手（R）を含む、譲渡を表す動詞である。Malchukov によれば（Malchukov et al. 2010: 31）、複他動詞においては、通常、例（53b）のように、逆受動化を受けるのは対象の項であり、受け手の項の逆受動化は通言語的にきわめて珍しい。しかし、例（54b）のように、アイヌ語では受け手の項の逆受動化が可能である（詳しい議論については Bugaeva 2011b: 248-49 を参照）。

(53) a. [*pirka us-ke*]$_T$ [*Ø＝ona-ha*]$_R$ *Ø＝Ø＝ko-puni*
良い 場所 -POSS 3.A＝父 -POSS 3.A＝3.O＝to.APPL- 上げる／伸ばす
「よいところを父親によそった。」（K8010291UP.152）

b. [*a＝Ø＝kor* *ekasi*]$_R$ *hoski-no* [*nea* *okkaypo* *utar*]$_A$
IND.A＝3.O＝持つ 祖父 早い -ADV その 男 PL
*ko-**i** T-puni*
to.APPL-APASS- 上げる／伸ばす
「（その若者たちは）まず先におじいさんに料理をよそり、」（K7803231UP.072）

(54) a. [*a＝sa-utar-ihi*]$_R$ [*nep* *ka*]$_T$ *a＝Ø＝e-kasuy* *ka*
IND.A＝姉 -PL-POSS 何 さえ IND.A＝3.O＝with.APPL- 手伝う さえ
somo *ki* *no*
NEG する.AUX て
「姉さんたちの仕事を何も手伝うこともせずに」（K7908032UP）

b. *tokaci*　*wa*　*Ø＝ek*　*Ø＝pewre*　*kur*　[*monrayke*]$_T$
十勝　ABL　3.S＝来る.SG　3.S＝若い　男　仕事
*Ø＝Ø＝e-**i**$_R$-kasuy*　*wa*
3.A＝3.O＝with.APPL-APASS- 手伝う　て
「十勝から来た若い者仕事手伝って」（SK 160）（石狩方言）

一般的に、アイヌ語の逆受動は、適用態や使役にくらべてはるかに生産性が低く、一部の動詞からしか派生されない。逆受動を派生する動詞として、たとえば、追求・主語への影響・知覚・認識・相互作用などを表す動詞がある（Bugaeva, forthcoming b）。*ku*「…を飲む」（他動詞）→ ***i**-ku*「酒を飲む」（自動詞）のように、語彙化された逆受動形も多い。

4.4.1.4　相互態と共同態

相互の意味は接頭辞 ***u-*** によって表現される。ほとんどの場合（object-oriented な相互と「間接」相互の場合と除き）、相互態の派生は（55）のように自動詞化である。アイヌ語の相互態と共同態の詳細は Alpatov et al.（2007）を参照。

（55）a'. *káni*　*anak*　*húci*　*ku＝Ø＝koyki*　（他動詞）
1SG　TOP　祖母　1SG.A＝3.O＝いじめる
「私は祖母をいじめた」（OI）
a''. *húci*　*(káni)*　*en＝koyki*　（他動詞）
祖母　1SG　1SG.O＝いじめる
「祖母は私をいじめた」（OI）
→　b. *(cókay)*　***u**-koyki＝as*　（自動詞）
1PL.EXC　REC- いじめる＝1PL.EXC.S
「私たちはお互いをいじめた」（OI）

共同態の派生は、結合価を変えず、特別な標示も現れない。たいてい、相互 ***u-*** と、さまざまな意味を表す適用態 ***ko-*** の組み合わせによって表現される。すなわち、純粋に形態的な観点から言えば、共同態は適用態から派生される相互態である。そのため、すべての共同態を、共同の適用態から派生された相互態であると見なしたくなるかもしれない[31]。しかし、ほとんどの場合、複合的な接頭辞 ***uko-***（ややまれに ***ue-***）は、単一の共同態の形態素として機能する。意味的に、共同態は、形のうえで中間的な ***ko-*** 適用態ではなく、むしろ、***ko-*** のない非適用態の動詞に直接に意味的に関係づけられる。つまり、意味的に（56b）は（56c）ではなく、（56a）と関係づけられる。

（56）a. *pakoat*　「罪に問われる」（T 507; OI）　（自動詞）
b. ***uko**-pakoat*　「全員が罪に問われる」（T 760; OI）　（自動詞）
cf. c. ***ko**-pakoat*　「…の巻き添えをくう」（T 331）　（他動詞）

uko- は、object-oriented な相互態の標示としても生産的に使われる。たとえば、*ninu*「…で縫う」（他動詞）（T 419）→ ***uko**-ninu*「（2 つ以上のモノを）一緒に縫う」（他動詞）（T 759）。

共同態の意味を表すもうひとつの方法として、相互態 ***u-*** と使役 ***-re***/***-e***/***-te***（ややまれに ***-ka***）の組み合わせもある。たとえば、*mina*「笑う」（自動詞）→ ***u**-mina-**re***「一緒に笑う」（自動詞）（OI）。

相互態の接頭辞は、一部の名詞に付いて、***u**-tek*「両手」のように、双数の標示としてはたらくことがある。名詞でも、動詞でも、家族関係を表すのに用いられることもある。たとえば、*ona*「父」→ ***u**-ona-kor*「父と

子（という関係）になるべき」。関係名詞や後置詞が相互態の形をとることもある。例：*sam*「そば」→ ***u-sam***「互いのそばで」、*tura*「…と」→ ***u-tura***「お互いとともに、一緒に」。

4.4.1.5　再帰と逆使役

アイヌ語ほとんどの文法記述で再帰接頭辞には ***yay-*** と ***si-*** の 2 つがあるとされており、また、***yay-*** が意図的な行為を表すのに対し、***si-*** は非意図的な行為（中相）を表すとされている（田村 2000: 204）。これは金田一（1993［1931］: 280）がはじめて指摘したことであるが、金田一はその例として、***yay-pusu***「自分の力で（泳いで）浮かび出る」と ***si-pusu***「おのずから浮かび出る」というひとつのペアしか挙げていない。***yay-*** と ***si-*** の区別をさらに明らかにしようとする最近の試みがいくつかある。Kirikae（1994: 316）は、***yay-*** が「動作主的な self」であるのに対し、***si-*** は「被動作主的な self」であると述べている。これは金田一の解釈に近い。佐藤（2007a: 31）はその区別を「直接再帰」と「間接再帰」という観点から説明しようとしており、“In the direct reflexive (***yay-***), the coreferential subject participates in the activity directly, while in the indirect reflexive (***si-***), it participates in the activity only indirectly either in the sense that the subject “does” the activity only with the help of some other person or in the sense that the subject is related to the activity merely locationally”（直接再帰（***yay-***）では、同一指示の主語が行為に直接に関与するのに対し、間接再帰（***si-***）では、間接的にしか関与しない。間接的にというのは、主語が誰かほかの人の助けで行為を行なう場合や、あるいは、主語が場所的な意味でのみ行為に関係するような場合である）と述べている。これは、***si-*** には再帰使役の用法や、ほかにも意図的とは見なしにくい場合に使われることがあるためである。例：*kasuy*「…を助ける」（他動詞）→ *kasuy-**re***「…に…を助けさせる」（複他動詞）→ ***si-**kasuy-re*「…に自分を助けさせる」。

筆者の考えでは、再帰の機能は主に ***yay-*** が担っており、ほかの諸言語で再帰の形式でしばしば表されるようないくつかの機能（Geniušienė 1987）も持ち合わせる。いくつかの機能とは、再帰所有（例：*ko-yupu*「…を…に取り付ける」（複他動詞）→ ***yay-**ko-yupu*［refl-to.appl- 取り付ける］「…を自分自身に取り付ける」（他動詞）（AB 47））や、再帰的な使役 autocausative（例：*osura*「…を投げる」→ ***yay-**osura*「身を投げ出す」（NV 93））の表現である。稀に、逆使役を表すこともある（語彙化されている例：*nu*「…を聞く」（他動詞）→ ***yay-**nu*［refl- 聞く］「思う」（自動詞）（AB 47））。

一方、伝統的な中動／非意図的再帰の解釈の通り、***si-*** の機能は主に逆使役（もともとの O を S に変える）である。しかし、***si-*** はまた、自動使役（autocausative）（例：*etaye*「…を引く」（他動詞）→ ***si-**etaye*［refl- 引く］「引き返す（中に戻る）」（自動詞）（AB 47））や再帰使役（reflexive causative）を表すのにも生産的に用いられる。***si-*** は関係名詞に付いて再帰を表すこともあり（例：*osmak*「後ろ」→ ***si-**y-osmak*「自分の後ろ」（T 671））、これは ***si-*** がもともと再帰の機能を担っていたことを示唆するものである。おそらく再帰の新しい形式として ***yay-*** が用いられるようになったために、後に自動使役とほかの「中動」の機能を発達させたのであろう。

逆使役を表す形式は ***si-*** のほかにもある。「自動詞接尾辞」***-ke***（表 4、スロット V）[32]も逆使役の形式であると考えられる（ただし、***-ke*** の使用は ***si-*** よりも語彙化されている）。例（57a）の ***yas-*** のような拘束語幹においては、逆使役 ***-ke*** と使役 ***-V*** が交替する。別の方言を扱った Refsing（1986: 188）の記述とは異なり、北海道南部のアイヌ語では、***-ke*** による派生は少数の動詞に限られるものではない。筆者の見つけた限りでは、24 の動詞で ***-ke*** による派生が可能で、いずれも典型的な逆使役の意味を表す（Bugaeva 2010b）。

（57）a.　［*hon-i*］$_{O}$　*Ø＝yas-a*　*wa*　*Ø＝cipor-i*　*Ø＝san-ke*
　　腹 -POSS　3.S＝裂く -CAUS　て　3.A＝筋子 - 所属　3.S＝下りる -CAUS
　　「（魚の）腹を割いて筋子を出した。」（N 394）
　b.　*kotan*　*noski*　*wa*　*Ø＝poro*　［*kem*　*tak*］$_{S}$　*Ø＝hopuni*　*wa*
　　村　真中　ABL　3.S＝大きい　血　塊　3.S＝飛ぶ .SG　て

kotan　*enka*　*ta*　*Ø＝yas-**ke***
村　　上　　LOC　3.S＝裂く -ACAUS
「大きな血の塊が村の真ん中から飛んでいき、村の上で破裂した。」（AB 177）

4.4.1.6　名詞抱合

名詞抱合は、節の中核的な項（主語または目的語）が、動詞に「くっつく」あるいは「取り込まれる」ものである。アイヌ語における統語的な名詞抱合には 3 つの主要なタイプがある。O、S、非動作主的な A の 3 つである。名詞抱合を持つ言語は世界の諸言語の中でも比較的珍しく、とくに A の抱合は、名詞抱合を持つほかの諸言語でもほとんど見られない。

機能面では、抱合は背景化のプロセス（Hopper & Thompson 1980: 254）であると特徴づけることができる。すなわち、抱合が起きるのは、その参与者よりも事態そのもののほうがより重要であるような場合である。名詞項が談話的に重要であったり、有生性や特定性（specificity）などが高かったりする場合には、抱合は起こりにくい。すでに知られているように、概念的にひとつにまとまった、その文化に特徴的な行為を表すために、O の抱合によって自動詞語根を得る操作がもっとも広く見られる抱合のタイプである（Mithun 1984）。

アイヌ語でもやはり O の抱合がもっとも頻繁に起こる。抱合によって結合価がひとつ減る。例（58）では、最初の *turep* が抱合されているのに対し、2 つ目の *turep* は独立の名詞である。抱合によって A の人称接辞が S に変わっている。

（58）　*turep-ta＝**as***　　*kus*　*paye＝as*　　*wa*　*poro-n-no*
ウバユリ - 掘る＝1PL.EXC.S　ために　行く .PL＝1PL.EXC　そして　たくさん -EP-ADV
turep　***ci**＝Ø＝ta*　　*wa*　*sap＝as*
ウバユリ　1PL.EXC.A＝3.O＝掘る　て　降りる .PL＝1PL.EXC.S
「ウバユリ掘りを私達はしに行ってたくさんウバユリを掘って下さった。」（ST1 220）

例（59）のような A の抱合でも同様に結合価が減る。もともとの A は抱合によって項の位置から削除され、もともとの O が S の位置に昇格している。

（59）a.　*nis*　*Ø＝en＝reye-re*
雲　　3.A＝1SG.O＝這う -CAUS
「雲が私を静かに運ぶ」（ST 197）
b.　[*káni*]$_S$　*ku＝nis-reye-re*
1SG　　1SG.S＝雲 - 這う -CAUS
「私は雲が静かに運ぶ」文字通りには「私は雲運びに遭う」（ST 197）

S の抱合は、例（60）のように、結合価をひとつ減らしてゼロ項動詞を生みだす。また、例（61b）のように、名詞（ふつうは身体部分や関係名詞）が所属形で抱合されると同時に新たな S が導入されるという、結合価の再編が起こることもある。

（60）　*tan-to*　*sir-pirka*　*siri!*
この - 日　様子 - 良い　様子
「今日はいい天気だこと！」（NN 38）
（61）a.　*asinuma*　*anak-ne*　*a＝kema*　*Ø＝pase*
IND　TOP-COP　IND.A＝足 .POSS　3.S＝重い
「私は年老いた。」文字通りには「私は私の足が重くなった。」）（OI）

b. *tane* *anak-ne* *kema-pase＝an* *pe* *ne* *kusu*
今／すでに TOP-COP 足 .POSS - 重い＝IND.S NMR COP だから
「もはや年老いたので」文字通りには「もはや足の重さがあったから…」（N 173）

O の抱合は、適用態の動詞ではきわめて頻繁に起こる。例（62）のように、もとの他動詞が持っていた目的語が抱合されるだけではなく、2 項動詞（例（63a））や 3 他動詞（例（64a））から適用態を派生することによって新たに目的語になった、特定の意味役割を持つ項が抱合されることもある。***e-*** 適用態では道具や理由／目的を表す項が、***ko-*** 適用態では共同の被動作主（例（64））や目標を表す項が、あるいは、***o-*** 適用態では場所や目標（例（63））を表す項が抱合されうる（Bugaeva 2010a: 788-92）。

（62） *sísam* *anak-ne* *kampi* *cipetpap* *Ø＝Ø＝**e**-kamuy-nomi*[33]
和人 TOP-COP 紙 破れ紙 3.A＝3.O＝with.APPL- 神 - 栄誉
ki *p* *ne*
する .AUX NMR COP
「和人は本当に破れ紙つきの神を崇めている」（AB 357）

（63） a. *ar-kamuyasi or-o* *a＝Ø＝**o**-arpa* *ruwe* *ne*
全く - 悪魔 所 -POSS IND.A＝3.O＝to.APPL- 行く .SG INF.EV COP
「（極悪の化物が死んだところで死んだならば、魂が）極悪の化物のところへ行くことになる」（N 20）
b. *kamuy-or-**o**-arpa＝an* *ka* *e-aykap* *korka*
神 - 所 -to.APPL- 行く .SG＝IND.S さえ of.APPL- できない .AUX しかし
「あの世へ行くこともできなかったのですが、」文字通りには「神々の世界に」（K8109171UP.121）

（64） a. *a＝Ø＝uhuy-ka* *pa* *wa* *cise* *a＝Ø＝**ko**-uhuy-ka* *pa*
IND.A＝3.O＝燃やす -CAUS PL そして 家 IND.A＝3.O＝with.APPL- 燃やす -CAUS PL
「（その後で、あんなことをしたのだから、）家ごと燃やしてしまおう。」（K7908032UP）
b. *Ø＝hotke* *kurka* *ta* *ponyaunpe* *a＝Ø＝cise-**ko**-uhuy-ka*
3.S＝眠る 上 LOC ポニャウンペ IND.A＝3.O＝家 -with.APPL - 燃やす -PL
「寝ているところでポニャウンペを家ごと燃やしてしまった。」（O4 12）（静内方言）

3 項の使役動詞では、被動作主（例（65a））ともともとの目的語（例（65b））のどちらも抱合されうる。

（65） a. *sut-ketusi* *a＝Ø＝san-ke* *wa,*
祖母 - 箱 IND.A＝3.O＝降りる .SG -CAUS そして
*a＝Ø＝tek-kus-pa-**re*** *wa* *inkar＝an* *akusu,*
IND.A＝3.O＝手 - 通り過ぎる -PL-CAUS そして 見る＝IND.S （する）と
「私は嫁入り道具の箱を取り出して、そのなかに手を入れ、中を覗いた…」（AB 153）
b. *hoski* *Ø＝ek* *ay...* *a＝Ø＝si-y-oka-kus-**te***
前 3.S＝来る.SG 矢 IND.A＝3.O＝REFL-EV - 後 - 通り過ぎる -CAUS
「私は私の後ろに最初に届いた矢を送った」（AB 348）

sik「いっぱいだ」（自動詞）→ ***e-sik***「…でいっぱいだ」（他動詞）→ ***e-sik-te***「…でいっぱいにする」（vd）のように、使役と適用態の両方の派生を経て 3 項を持つ場合には、やや語彙化されつつ、両方の名詞の抱合が可能であることが例で確認されている。

(66)　*a=yup-utar-i*　　*ka*　*Ø=*[***po***]$_{Oa}$-[***sir***]$_{Oc}$*-e-sik-te*
　　IND.A＝兄 -PL-POSS　も　3.S＝息子 - 世界 -by.APPL- いっぱいだ -CAUS
　　「兄達も子供をたくさん持った」文字通りには「世界を子供でいっぱいにした」）（ST2 61）

O の抱合については一般的な制約が 1 つある。有生で、かつ特定で指示的な目的語は抱合できない。そのため、間接使役において被動作者が抱合されることは決してない（例（65a）と（66）はどちらも直接使役の例である）。また、受け手／受益者の意味役割を持つ適用態の目的語も抱合されない。

アイヌ語では、特に口承文芸で、O の抱合が頻繁に見られる（S/A の抱合は稀）。とくに、もとの動詞が 3 項動詞である場合に、抱合が好んで用いられる。目的語が 2 つ現れる「重い」構文を避ける便利な手段として抱合が機能していると考えられる。もとの動詞が 2 項動詞である場合には、O の抱合は追求・主語への影響・知覚・認識・相互作用を表す動詞でもっとも頻繁に起こる（Bugaeva forthcoming b）。これはちょうど逆受動と同じ傾向である（4.4.1.3 節）。

4.4.1.7　アイヌ語における結合価のクラス

すでに見てきたように、アイヌ語は結合価を変えるさまざまな形式の組み合わせを持つが、それがどこまで自由にできるかには当然ながら制限がある。それらの制限にはたいてい意味的な理由がある。結合価を変更するある種の交替は、特定の意味的なクラスの動詞にしか適用されない。そこで、結合価を変えるさまざまな手段を通して、潜在的な動詞の分類の原理を明らかにすることができる。以下に示すのは、データベースに基づいた体系的な（MPI）調査によって得られた、アイヌ語の動詞分類の試みである。調査では、標示形式の特徴と、適用態・使役／逆使役・逆受動（Bugaeva forthcoming b, c）といった結合価を変えるそれぞれの操作が可能かどうかという点について、70 の動詞を分析した。再帰と相互は考慮されていない。

I.　他動詞
　a.　結果を伴う行為（～逆使役 ***-ke***）
　b.　接触（適用態 ***e-***）
II.　中動詞（他動詞と異態（deponent）自動詞の逆受動 ***i-***）
　a.　追求／主語への影響／知覚／認識（他動詞：逆受動 ***i-***、適用態 ***ko-***）
　b.　相互作用（異態（deponent）自動詞の逆受動 ***i-***：適用態 ***ko-***、***e-***、二重適用態 ***e-ko-***/***ko-e-***）
III.　自動詞
　a.　感情／情動／能力（自動詞と異態（deponent）他動詞の適用態 ***e-***、***ko-***）（自動詞：適用態 ***e-***、他動詞の適用態 ***e-***：適用態 ***ko-***）
　b.　動き／位置／存在（適用態 ***e-***、***ko-***、***o-***）
　c.　自発（行為／プロセス／状態）（直接使役 ***-V***、***-ke***、***-ka*** と ***-re***/***-e***/***-te***）
IV.　ゼロ項動詞
　a.　天候（無し）

結合価を変える操作がもっとも広く可能なのは、例（42）の *ruska*「…に怒る」など、相互作用を表す動詞である。3 項動詞はすべて派生されたものなので、独立のクラスを構成しない。アイヌ語の動詞の結合価のクラスは、Tsunoda（1985）の階層や Malchukov（2005）の 2 次元の階層に概ね合致する。

4.4.2　複合的動詞句

アイヌ語の動詞は純粋に時制のみを標示する方法を持たないが、アスペクト、モダリティ、証拠性を標示することはできる。それらの標示は、［動詞＋助動詞］あるいは pair verb［動詞＋接続詞＋補足的な動詞］のような、複合的動詞句において実現する。

4.4.2.1　助動詞：アスペクト、モダリティ、証拠性

助動詞は原則として語彙的な動詞から発達したもので、常に本動詞の後に置かれる。助動詞は本動詞と結びついて、たいてい、ひとつのアクセントを持つ音韻的な単位を形成する。本動詞のみ人称接辞をとり、助動詞は人称接辞を伴わない。意味的に無理がなければ、ひとつの動詞が複数の助動詞をとることもある（福田（田村）2001［1960］: 57-68）。以下に、筆者の解釈を加えて、主な助動詞のリストを田村（2000［1988］: 111-21）から引用する。田村の解釈は“　”に入れて記す。助動詞の単数／複数の選択は、本動詞の主語の数によって決定される。

1. 完了アスペクト ***a***（SG）/***rok***（PL）（“PAST/PAST-PL”）
2. （非限界動詞で）継続アスペクト、（限界動詞で）反復…***a***（SG）/***rok***（PL）…***a***（SG）/***rok***（PL）（“emphatic continuative”）、（例（14），（52a））
3. 感嘆ムード ***aan***（SG）/ ***rok'oká***（PL）（cf. 千歳方言では ***an'an***（Bugaeva 2004: 76））（“determined”）
4. 願望ムード ***rusuy***（“want”）、（例（15d），（19b））
5. 反復・習慣的アスペクト ***ranke***（“repetition”）
6. 推測・蓋然性ムード ***nankor***（“perhaps”）
7. 近完了アスペクト ***nisa***（“just finished”）
8. deontic ムード（***easirki*** “must”）、そのほか 6 つの助動詞がある（田村 2000［1988］: 117-21）を参照）

金田一（1993［1931］: 293）は ***a*** を「完了態」、知里（1974［1936］: 157）は「完了あるいは過去」と呼んでいる。田村（2000［1988］: 111）は PAST というグロスを当てているが、福田（田村）（2001［1960］: 61）では、***a*** が完了の標識であると明確に述べている。福田（田村）（2001［1960］: 61）によれば、***a*** の付いた（***a*** の前の）動詞は「現在問題になっている時よりも以前に行動が行われたことを」表す。そこで、筆者は完了と解釈することにする。

（67）

a＝Ø＝roski	***a***	*inaw*	*opitta*	*kuca...*	*or*	*ta*
IND.A＝3.O＝立てる	PERF	イナウ	すべての	狩小屋	所	LOC

i＝hekota	*Ø＝hácir*	*wa*	*Ø＝okay*
IND.O＝の方へ	3.S＝倒れる	て	3.S＝存在する.PL

「私が狩小屋に立てたイナウ（木幣）がすべて私のほうに倒れてきた」（AB 187）

a（SG）/***rok***（PL）について、佐藤（2007b）はさらに、***a*** は「動作的完了 actional perfect」のみを表し、そのために、動詞の否定形とは共起しないと述べている。動詞の否定形は（例（67）の *hácir*「倒れる」のように）pair verb 構造によって表される「状態的完了 stative perfect」を要求する（4.4.2.2 節を参照）。

また、***okere***「終える」、***tunas***「早い」、***eramiskari***「知らない」など、アクツィオンスアルト Aktionsart や能力、知識などを表す動詞で、助動詞としても語彙的な動詞としても機能するものがある。助動詞として用いられる場合は、強調を表す小詞 ***ka*** などの語が挿入されうる。これは通常の動詞と助動詞の中間的なふるまいを示している。

ほかにも、助動詞として文法化されつつあるものとして、証拠性（evidentiality）を表す動詞がある。田村（1988: 76）によれば、「動詞句に終わる文［＝節― A.B.］の後に、特殊な名詞化辞 ***ruwe***/***hawe***/***siri***/***humi*** をおいてこれを名詞化し、その後にコピュラ ***ne*** をおいてコピュラ文［＝節］にすることがある」。これは節の名詞化としての分析である。Refsing（1986: 236）が指摘するように、この構文は日本語の「のです／のだ」（あるいは「予定だ」「ようだ」「ものだ」「はずだ」など― A.B.）と非常に似ている。また、それぞれの言語でこのタイプの構文の頻度が高いことは、言語的な近さによるものか、もしくは日本語からの統語的な借用と考えてもよいかもしれない（あるいはアイヌ語でとくに顕著ではなかった特徴が強くなった）。このような構文は

統語的に変則的で、世界の言語では比較的稀である。琉球語、朝鮮語、モンゴル語、トルコ語、チベット・ビルマ系の言語の一部にしか見つかっていない（角田 1996: 158）。

アイヌ語のこのような名詞化構文は、主要部名詞（名詞化詞（nominalizers））がもともとは普通名詞であった修飾節を起源とすることは明らかである（3.1 節、ならびに例（68）–（71）の翻訳を参照）。現在では、名詞化構文は、［動詞＋助動詞 ***ruwe***/***hawe***/***siri***/***humi-ne***[34]］（名詞＋コピュラ）という構造の複合述語に変化しようとしているところである。実際に、金田一（1993［1931］: 326-36）や知里（1974［1936］: 132–3, 155–7）は助動詞（助詞）と分析している。共時的な観点から、筆者は田村の名詞化節としての分析を支持するが、将来に助動詞として再分析される可能性も高いため、ここで議論する。

例（68）–（71）は、***ruwe ne***「…は事実である」、***hawe ne***「…と言われる」、***siri ne***「…のように見える」、***humi ne***「…と感じられる」を対照したものである。

（68）　*tokey*　*ku＝Ø＝sak*　　*ruwe*　*ne*
時計　1SG.A＝3.O＝欠いている　INF.EV　COP
「（推測するに）時計は持っていません」文字通りには「私が時計を持っていない**跡** ***ruwe*** がある」（KS #0270）

（69）　*yaysama,*　*Ø＝wen*　　***hawe***　*ne*
困ったな　3.S＝悪い／貧しい　REP.EV　COP
（聞いたことに対して）「困ったな。ひどいことだ。」文字通りには「悪いという**声** ***hawe*** がある」（KS #2891）

（70）　*húci*　*Ø＝ek*　*kor*　*Ø＝an*　***siri***　*ne*
祖母　3.S＝来る.SG　（し）つつ　3.S＝存在する.SG　VIS.EV　COP
「おばあさんが今来ているところだ。」lit.「おばあさんが来ている**様子** ***siri*** がある」（T2 228）

（71）　*eytasa*　*Ø＝tópen*　***humi***　*ne*　*pekor*　*ku＝yay-nu*
あまりに　3.S＝甘い　NONVIS.EV　コピュラ　そのように　1SG.S＝REFL- 聞く
「あまり甘い感じであるように私は思う。」文字通りには「私はそれが甘すぎるという**音** ***humi*** があると思う」（T2 228）

これらの構文は、証拠性を表す機能のほかに、さまざまな認識様態（epistemic）の機能を発達させた。断定を表す ***ruwe*** や蓋然性を表す ***hawe*** などである。このような機能はこれまであまり関心を払われてこなかった。

4.4.2.2　Pair verbs：アスペクト、モダリティなど

ある種のアスペクトやモダリティなどの意味が、［動詞＋接続詞＋補足的な動詞］という特別な構文によって表現される（田村 2000［1988］: 46, 151, 184）。似たタイプの構文はドラヴィダ語（Steever 1988）やチベット・ビルマ系の諸言語、さらにはロシア語（Peter Hook, 私信）などについて確認されており、それらの研究にならって、この構文を「pair verb 構文」と呼ぶことにする。最初の動詞は行為やプロセスを表し、2 つめの（補足的な）動詞はアスペクトやモダリティの意味を付け加える。どちらの動詞も完全な定形であり、人称標示（例（72））を持ち、必ずしも主語が同じでなくともよい（例（72h））。2 つの動詞を結びつけるのに用いられるのは、いくつかの接続詞に限られる（***wa***「そして」、***kor***「…ときに／ながら／であれば」、まれに ***híne***「そして」も）。それらの使用は概ね特定の構文に固定化されている。

もっともよく用いられるのは、状態的完了（＝完了状態）...***wa an***/***oka***［存在する .sg/pl］と進行相...***kor an***/***oka***［存在する.SG/PL］である。すでに述べたように、動作的完了の意味を表すには助動詞を用いた構文が用いられる。いずれの接続詞を用いた場合も、日本語では「…ている」で訳される。アスペクト的な pair verb 構文はしばしばアイヌ語の動詞を動作を表すものとプロセスを表すものに分類するテストとして用いられる（中川 1981, さらにそれを発展させた研究として、佐藤 2006）。統語的な他動性にかかわらず、*ye*「言う」（他動詞）

や *monrayke*「働く」（自動詞）（例（72a））といった動作動詞では進行相の構文をとる。それに対し、*ray*「死ぬ」（自動詞）（例（72g））や *kor*「持つ」（他動詞）（例（72e））などのプロセスを表す動詞では、進行相の構文をとらず、完了状態（例（72d, f））の構文しかとらない。その一方で、*monrayke*「働く」（例（72b））のような自動詞の動作動詞が完了状態を表さない（その代わり、例（72c）のように動作的完了を表す）のに対し、状態の変化を含意する他動詞の動作動詞は完了的結果を表すことができる。その場合、例（72h）の主語の標示が 2 つの動詞のあいだで一致しないことから分かるように、目的語の状態が表される。進行相を表す構文は習慣的な事態や起動相を表すこともある。

（72）a. *tane* *ku＝monrayke* ***kor*** *k＝an* *ma*
今 1SG.S＝働く て 1SG.S＝存在する.SG FIN
「今、私は仕事しているよ。」（ST1 195）

b. **tane* *ku＝monrayke* ***wa*** *k＝an* *ma*
（「私は働いた」）（作例）

c. *ku＝monrayke* ***a***
1SG.S＝働く PERF
「私は働いた」（作例）

d. *tu* *tamasay* *ku＝Ø＝kor* ***wa*** *k＝an* *ma*
二つの 首飾り 1SG.A＝3.O＝持つ て 1SG.S＝存在する.SG よ
「二つの首飾りを私は持っているよ。」（ST1 195）

e. **tu* *tamasay* *ku＝Ø＝kor* ***kor*** *k＝an* *ma*
（「私は首飾りを二つ持っている（ところだ）」）（作例）

f. *(isepo...)* *Ø＝ray* ***wa*** *Ø＝an*
兎 3.S＝死ぬ .SG て 3.S＝存在する.SG
「（その兎は）死んでいる」（ST1 195）

g. **(isepo)* *Ø＝ray* ***kor*** *Ø＝an*
（「（その兎は）死につつある」）（作例）

h. *inaw* *k＝Ø＝asi* ***wa*** *Ø＝an* *ruwe* *ne*
イナウ 1SG.A＝3.O＝立つ.SG て 3.S＝存在する.SG INF.EV COP
「（木幣）を私は立てているのだ。」文字通りには「私が木幣を置いて、それはあった」（ST1 195）

ほかにも、以下のような、日本語の表現に対応する pair verb 構文が存在する。これらは日本語の影響によって発達したと考えられる。完成相（perfective）***wa isam***［消える］「…てしまう」、受益 ***wa kor-e***［あげる］「…てくれる」（36）、準備 ***wa anu***/***ari***［置く.SG/PL］「…ておく」、***wa inkar***/***inu***［見える／聞こえる］（例（65a））「…てみる」、***wa ek***/***arki***［来る.SG/PL］「…てくる」、***wa arpa***/***paye***［行く.SG/PL］「…て行く」。

4.5 否定、命令、疑問

4.5.1 否定

否定文は副詞的な助詞 ***somo*** を動詞句の前に挿入してつくられる。これは日本語と大きく異なる点である。

（73） ***somo*** *k＝arpa* *wa*
NEG 1SG.S＝行く.SG FIN
「行かないよ。」（NN 28）

否定を強調するには、助動詞 ***ki***「…をする」（他動詞）が否定詞 ***somo*** とともに用いられる。その場合、形

のうえで否定されるのは ***ki*** であり、***somo*** の前のもとの動詞は ***ki*** の目的語の名詞句となる。名詞句をとくに強調するために、名詞句の後に限定的な助詞 ***ka***「さえ／も」が置かれることもある。田村（2000［1988］: 239）によれば、***ka*** は意外性の意味を伴う。

(74)　[*ku*＝*iruska*　*ka*]$_{O}$　***somo***　***ki***　　*wa*
　　1SG.S＝怒る　さえ　NEG　する.AUX　FIN
　　「怒ってなんかいないよ。」（T2 239）

動詞には、もとから否定の意味を含むものがある。たとえば、*isam*「存在しない」（cf. *an*/*oka*［存在する.SG/PL］）、*sak*「欠く」（cf. *kor*「持つ」）、*erampewtek*「分からない／知らない」（cf. *eramuan*/*eramuoka*［分かる／知っている .sg/pl］）などである。否定の詳細については田村（2000［1988］: 94, 226, 239-40）を参照。

4.5.2　命令

ここでは、命令を表現する特別な非平叙文、いわゆる命令法について述べる。命令法では動詞は A/S（指示対象は常に聞き手）の人称・数についての標示を持たない。例（75b）、（16a）のように、他動詞であれば O の標示をとりうる。複数の相手に対する命令（例（45a））や丁寧な命令（例（75c））の場合には、動詞句のあとに終助詞 ***yan***（例（45a））が付き、動詞が単数／複数を区別するものであれば、複数形になる（例（75c））。

(75)　a.　*sini!*（自動詞）
　　休む
　　「休め」（OI）

　　b.　***en***＝*siknu-re!*
　　1SG.O＝生きる -CAUS
　　「私を生かせてくれ」（OI）

　　c.　*rok*　　*yan!*
　　坐る.PL　IMP.POL
　　「坐ってください」または（複数の相手に対して）「坐れ !」（OI）

否定命令（＝禁止）は、副詞的な助詞 ***iteki*** を動詞の前に置くことで表現される。複数の相手に対する禁止や、丁寧な禁止の場合は、肯定の命令と同じように、***yan*** や（存在する場合には）動詞の複数形が用いられる。

(76)　a.　***iteki***　*utcike*
　　PROH　恥ずかしがる
　　「恥ずかしがるな !」（OI）

　　b.　***iteki***　（*nok*）　*Ø*＝*e*　　***yan***
　　PROH　鳥の卵　3.O＝食べる　IMP.POL
　　「鳥の卵を食べないでください」／「（お前たちは）鳥の卵を食べるな !」（作例）
　　（註：アイヌ人は鳥の卵を食べない。）

肯定文での命令の表現には、それぞれ丁寧さの度合いが異なる、さまざまな方法がある（助動詞や pair verb を用いる方法など）（田村（2001［1977］: 22-141）、および Bugaeva（2004: 20-93）の“periphrastic imperative expressions”を参照）。

4.5.3　疑問：極性・内容・選択疑問文

疑問文には特徴的な語順はなく、文末の抑揚が上昇する。極性疑問文の形態的な標示は無いが、疑問の口調を和らげる小詞 ***ya*** が文末に現れることもある。証拠性の標示された極性疑問文では、文末のコピュラ ***ne*** は省略される（例（68）と比較せよ）。

(76) a. *nisatta* *nupurpet* *or* *un* *e=arpa* ***ya****?*
明日 登別 所 all 2SG.S=行く.PL Q
「明日は登別に行くのかい？」(NN 28)

b. *yosiko* *e=ne* ***ruwe****?*
良子 2SG.A=COP INF.EV
「良子かい？」(NN 22)

内容疑問文は、対応する平叙文と同じ位置に現れる疑問詞を用いる。沙流方言の疑問詞には *hunna*「誰」(例(77))、*hemanta/hńta*「何」、*hunak/hinak*「どこ」などがある（田村 2000［1988］: 134-5）[35]。内容疑問文では助詞 *ya* が用いられるのは稀である（田村 2000［1988］: 236）。コピュラを含む内容疑問文では、***ne*** はしばしば存在を表す ***an***［存在する.SG］(自動詞) に取って代わられる。証拠性が表される場合は、例 (77b) のように、***ne*** は義務的に ***an*** になる（田村 2000［1988］: 236-7）。

(77) a. *eani* ***hunna*** *e=Ø=ko-isoytak?*
お前.SG 誰 2SG.A=3.O=to.APPL- 話す
「お前は誰と話しているのか？」(OI)

b. *núman* ***hunna*** *Ø=ek* *ruwe* ***an****?*
昨日 誰 3.S=来る.SG INF.EV 存在する.SG
「きのうだれが来たのですか？」(T2 237)

選択疑問文は 2 つの疑問の並列によって表現される。並列された 2 つめの要素は、部分的に省略されることもある。疑問の焦点となる要素それぞれの後に助詞 ***he*** が置かれる。詳細は、田村（2001［1978］: 142-54）を参照。

(78) *matci* ***he*** *e=Ø=kor* *rusuy* *tampaku* ***he*** *e=Ø=kor* *rusuy*
マッチ FOC 2.SG.A=3.O=持つ DESID タバコ FOC 2SG.A=3.O=持つ DESID
「マッチがほしいのか、それともタバコがほしいのか？」(T2 234)（グロスは筆者によるもの）

4.6 節連結：等位接続、従属、補文

等位接続と従属は接続詞によって標示される。もっともありふれた等位接続詞は ***wa***「そして」(例 (20a)、(50c)、(57a/b)、(58)、(64a)) で、同一指示ではない主語の場合にも用いられる。そのほかの等位接続詞として、***híne***「そして」、***ayne***「(した) あげく」(例 (21))、***awa***「(した) が」、***akusu/akus***「(する) と」(例 (65a))、***kor***「(し) ながら、(し) つつ」(例 (20a)、(21))、(70)) がある。おそらく、***korka***「しかし」(例 (19b)、(63b)) も含められるだろう。従属接続詞も多い。***kusu***「(する) ために、だから」(例 (15d)、(18b)、(24a))、***kuni*** (***ne***)「べく、(する) ように」、***kor***「(する) と、(した) ところ」(例 (50b)、***yak***「(すれ) ば」(例 (17a))、***yak-un***「…ならば」、***ciki***「…(し) たら」(例 (17b))、***yak-ka***「(する／した) ならば」(例 (45b)、***hike***「(した) ところ、(し) ても」、***hike ka***「(した／している) のに」、***pe/p*** (***ora***)「のに、(だった) が」など（田村 2000［1988］: 157-73；ただし、田村は等位接続と従属接続詞を区別していない）。

アイヌ語の補文は、統語的に S あるいは O として機能することができるが、A になることは稀である。補文と主節の接続は通常、補文標識によって標示される。補文標識には、英語の that のように特別な意味を持たないものや、補文の内容に特定の認識様態 (epistemic) の含意を与えるものがある。後者のタイプの補文標識は、最近になって類型論の研究者の関心を惹くようになった (Frajzyngier 1995)。補文標識としてもっともよく用いられるものとして ***hi/i*** (<「モノ／所」)、***pe/p*** (<「モノ／人」)、認識様態を表す ***kun-i*** (***-hi***) (<「べく、するように、のはず - モノ (-POSS)」) がある。補文標識の選択は、文脈と主節の述語の意味 (例 (24a)) に条

件づけられる（詳細については Bugaeva 2008a: 67-8 を参照）。

5　語彙

アイヌ語には、現代文明の所産や抽象的な概念を表す語彙はほとんどない。その一方で、植物や狩猟、漁労、採集などに関連する豊かな語彙を持つ。数詞は、10 と 20 に基づく興味深い体系を持つ。1 から 6 まで（*sine-p*、*tu-p*、*re-p*、*íne-p*、*asikne-p*、*iwan-pe*；「6」は一般に「たくさん」の意味を表す）と *wan-pe*「10」、*hot-ne-p*「20」は単純な形式であるが、「100」を表す数詞はない。「6」から「9」までの数詞は、「10」との差にしたがってつくられている。たとえば、*tu-p-e-san-pe*「8」（< 2- もの .cl-appl-10- もの .cl）は、文字どおりには「10 まで 2 つ」という意味に解釈できる。「10」から「20」までの数詞は、「10」をもとにつくられるが、「20」を越える数詞はすべて「20」をもとにして、掛けたり引いたり加えたりしてつくられる（田村 2000［1988］: 255）。たとえば、*wan-pe* ***e****-tu-hot*「30」（< 10- もの .CL APPL-2-20）（H 262）は「40 引く 10」を意味するが、文字どおりには「（あと）10 で 20 の 2 倍」である（H 262）。

北海道南部方言のアイヌ語における借用語のほとんどは日本語からのものである。例：*sippo*「塩」、*umma*「馬」、*túki*「杯」、*kampi*「紙」。アイヌ語から、とくにそれが表す品物とともに、日本語に借用された語彙も少数ある。例：*sake*/*shake*「鮭」（< アイヌ語 *sak-ipe*［夏 - 食べもの］？）、*rakko*「ラッコ」、*shishamo*「シシャモ」（< アイヌ語 *súsam*）。アイヌ語は日本語の文法に影響を与えていないが、日本語はアイヌ語の文法の大きな影響を与えた。このことは次節で短く議論する。

6　むすび：アイヌ語と日本語

アイヌ語と日本語は構造的に深いレベルで大きく異なる。代名詞的な動詞の標示や、項の格関係の標示の欠如、混合型（基本的には三立型）の文法関係標示、主要部標示型の所有構文、時制の標示の欠如、結合価を変える数多くの（適用態などの）操作、名詞抱合などは、日本語にはないアイヌ語だけに見られる特徴である。しかし、これらの構造的な隔たりにもかかわらず、日本人のアイヌ語（言語学者ではない）学習者の多くは、2 つの言語が非常に似ているという印象を抱き、実際に、ヨーロッパの諸言語の話者よりも、習得が早いことが多い。これには、音韻的な体系が似ていること、（肯定の平叙文の）構成素順が同じであること、日本語との接触によりアイヌ語が獲得・発達させたと推定される分析的な構文が、一見、日本語によく似ていたり、なかにはそのまま日本語に直訳できるものがあることなどがその理由であろう。

日本語の影響でアイヌ語が発達させたと推定される構造には、以下のようなものがある。

(a) 関係節その他の名詞修飾構造（4.3 節）
(b) 証拠性を表す構文（4.4.2.1 節）
(c) 日本語のさまざまな構文の意味をそのまま引き写す pair verb 構文（4.4.2.2 節）
(d) 非人称受動における、方向格名詞句による降格された動作主の表現（日本語の受動構文の影響であると考えられる）（例（26b））

最後の話し手たちのアイヌ語には、日本語の構造的（ならびに音韻的（2.1 節を参照））な影響がさらに顕著である。たとえば、後置詞の使用が頻繁であること、適用態があまり使用されなくなったこと（4.4.1.1 節）、後置詞による言い換えができない ***ko-*** 適用態（例（22）、（53a/b））の代わりに、受益を表す pair verb 構文である ***wa kore***（日本語の「…てくれる」に相当）（例（36））が用いられるようになったことなどが挙げられる。アイヌ語において言語接触によって引き起こされた文法の変化は、これまで充分な関心を惹いてこなかった問題であり、今後の考察が待たれる。

略号一覧

1, 2, 3	person indexing	人称の相互参照
A	transitive subject or possessor	他動詞主語または所有者
ABL	ablative	奪格
ACAUS	anticausative	逆使役
ADV	adverbial	副詞的
ALL	allative	方向格
APASS	antipassive	逆受動
APPL	applicative	適用態
about.APPL		適用態（～について）
at.APPL		適用態（～に／で）
by. APPL		適用態（～で／によって）
to.APPL		適用態（～へ）
with.APPL		適用態（～によって／と）
AUX	auxiliary verb	助動詞
C	consonant	子音
CAUS	causative	使役
CC	copular complement	コピュラの補語
CL	classifier	類別
COM	comitative	共格
COP	copular	コピュラ
CS	copular subject	コピュラの主語
DAT	dative	与格
DESID	desiderative	願望
DIM	diminutive	指小
EP	epenthetic consonant	挿入子音
EXC	exclusive	除外
EV	evidentiality	証拠性
INF.EV	inferential evidentiality	推量の証拠性
REP.EV	reportative evidentiality	伝聞の証拠性
VIS.EV	visual evidentiality	視覚の証拠性
NONVIS.EV	nonvisual (sensory) evidentiality	非視覚的感覚の証拠性
FIN/FP	final particle	終助詞
FOC	focus	焦点
HOR	hortative	勧誘
IMP	imperative	命令
IND	indefinite	不定人称
INST	instrumental/Instrument	具格／道具
ITR	iterative	反復
LOC	locative	場所格
NEG	negative	否定
O	transitive object	他動詞目的語
O_a	applicative object	適用態の目的語
O_c	causative object	使役の目的語

P	Patient	被動作主
PERF	perfect	完了
PL	plural	複数
POL	polite	丁寧
POSS	possessive	所属
PROH	prohibitive	禁止
Q	question	疑問
QUOT	quotation	引用
R	Recipient	受け手／受益者
REC	reciprocal	相互
REFL	reflexive	再帰
S	intransitive subject	自動詞主語
SG	singular	単数
T	Theme	対象
TOP	topic	主題
V	vowel	母音
vi	intransitive verb	自動詞
vt	monotransitive verb	2 項動詞
vd	ditransitive verb	3 項動詞

註

⑴ 『もしほ草』（1972）は上原熊次郎と阿部長三郎が編纂したもので、2740 の語彙と何編かのテキストを収録している。金田一（1972）として再刊。

⑵ オーストロアジア祖語は、モン・クメール祖語（Proto-Mon-Khmer）、ヴェト・ムオン祖語（Proto-Viet-Muong）、ワ祖語（Proto-Wa）、モン祖語（Proto-Monic）をもとにして再建される。

⑶ 日本語の祖先も縄文語のひとつなのかどうか、それがアイヌ語に関係づけられるのか否かについては明らかではない（2011 年 7 月 30 日に大阪で行われた ICHL20 国際シンポジウムでも取り上げられた）。

⑷ アイヌ人の精神世界や世界観の詳細については Munro（1962）、Fitzhugh & Dubreuil（1999）、アイヌ民族博物館（2008［1993］）を参照。

⑸ アイヌ語の有名な教科書である、音声テープ付きの田村（1979, 1983a, 1984）は、一般を対象にした入門書には含めていない。これは、一般向けには必須であるアイヌ語のカタカナ表記を用いていないためである。同書はインターネット上で閲覧可能（http://dspace.wul.waseda.ac.jp/dspace/handle/2065/873）。現在では、アイヌ語のラテン文字表記からカタカナ表記への転写、あるいは逆にカタカナ表記からラテン文字表記への転写は特別なソフトのおかげで容易にできるようになった。インターネット上で無料で利用できる（http://www.geocities.jp/aynuitak/WEBhenkan/chiyu.htm）。

⑹ アイヌ語講座が毎年開かれている大学として、千葉大学、北海道大学、北海学院大学、札幌学院大学、早稲田大学がある。東京大学と東京外国語大学では不定期に開講されている。

⑺ インターネット上で閲覧できる：http://www.stv.ne.jp/radio/ainugo/index.html。

⑻ アイヌ語の初期の記録については、田村（2000［1988］: 7-9）を参照。Refsing（1996）は、ヨーロッパ人によるアイヌ語の記録をまとめたものである。

⑼ 20 世紀後半にアイヌ語について日本人研究者によって書かれた論文の大半は、『アイヌ語考 文法 I-II』第 4, 5 巻（2001 年、東京：ゆまに書房）に収録されている。

⑽ 地理的には、北東部方言（十勝方言、帯広方言など）のほうが、はるかに広い範囲に分布している。「アイヌ語」の代表としては、南西部方言よりも北東部方言のほうが、よりふさわしいと言えるだろう。

⑾ Refsing（1986: 69）はアイヌ語に二重母音があると主張しているが、彼女の扱っている静内方言（北海道北東部）については筆者は直接の知識を持たない。

⑿ Vovin（1993: 175）は、アイヌ祖語に 12 の短母音と 6 つの長母音を再建している。それらの長母音（のうち 5 つ）は樺太方言にのみ残る。しかし、ほかのあらゆる点について、樺太方言は北海道方言よりもかなり「新しい」特徴を具えているので、筆者には、この結論はきわめて奇妙であると思われる。

⒀ 樺太のライチシカ方言（樺太西岸）について、村崎（2009: 6）は非弁別的な高低アクセントも持っていると述べている。

⒁ 一部の語彙化された使役形では、接尾辞 ***-re***/***-e***/***-te*** がアクセントに影響を与えている。例：*kor*「持つ」> *ko.r-**é***「持たせる、与える」（アクセント規則に適っている）。

⑮　佐藤（2008: 3）の分類は田村（2000［1988］: 36）の分類と似ているが、代名詞と接続詞を独立した品詞として分けていない。代名詞は名詞に、接続詞は小詞に含めている。下位分類についても異同がある。

⑯　260-264 頁では「空間的・観念的指示詞」としているが、92-93 頁では同じものが「指示的連体詞」と呼ばれている。

⑰　S は自動詞の主語、A は他動詞の主語、O は他動詞の目的語を指す略号である。いずれも意味役割を表すものではない（Dixon & Aikhenvald 1997: 72）。

⑱　「…にある／いる／存在する」という所在の意味は、所在を表す特別な自動詞 *an*/*oka*「存在する、現れる（SG/PL）」によって表される。

⑲　特に 3 人称の人称代名詞がテキストに現れることはほぼない。代わりに普通名詞が用いられる。

⑳　非人称受動 impersonal passive（Bugaeva 2011a）とも呼ばれる。例（26b）も参照。非人称受動としての分析は佐藤（1995）によるものである。

㉑　伝統的に、不定人称のこれらの機能は、さまざまな意味を表す同音異義として扱われてきた（金田一 1993［1931］、知里 1974［1936］、久保寺 1977、田村 1970, 2001［1972a］、Shibatani 1990、佐藤 2004）。ここでは不定人称の機能を統一的に扱う。このような分析は、北海道南部のアイヌ語とは大きく異なる静内方言（北海道北東方言）について Refsing（1986: 219）が行なったもので、沙流方言（北海道南西方言）についての田村（2000［1988］）の分析や千歳方言（北海道南西方言）についての中川（1995, 1997）の分析に取り入れられた。

㉒　起源的に ***asinuma*** は、不定人称を標示する ***a***＝に 3 人称単数代名詞 ***sinuma***「彼／彼女」が後続したものであることが明らかである。筆者の考えでは、これは‘self’（自分）のようなものである。田村（1972a: 376）は以前は ***asinuma*** を「話題になっている話し手、人」と解釈していた。

㉓　これ以降の例文は、大きな引用としての物語の一部を成すものであるため、不定人称は logophoric な機能を持っている。

㉔　関係名詞（***or***「場所」あるいは ***or-o***「…の場所」）の概念形と所属形の選択は、それに先行する名詞の有生性に条件づけられる。例（26b）のように、先行する名詞が有生の場合は所属形が、例（23）、（24）のように無生の場合はたいてい概念形が用いられる（無声の場合に所属形が用いられることも稀にある）。

㉕　（狭義の関係節だけではなく）節を修飾するあらゆる種類の要素を指す一般的な名称として Matsumoto（1997）が用いた術語である。

㉖　日本語とアイヌ語の名詞修飾と名詞化の構造を比較・分析した論考に奥田（2001［1989］）がある。しかし、例（41）のような構造は扱われていない。

㉗　不定使役を表す接尾辞 ***-yar***/***-ar*** は結合価を変化させない。不定の被使役者が項として現れないためである。

㉘　適用態と使役の両方のタイプの 3 項動詞の形式とふるまいの詳しい議論については Bugaeva（2011b）を参照。

㉙　Kirsten Refsing が聞き取りを行なった同じ話し手（織田ステノ氏、静内方言、北海道北東方言）の韻文の口承文芸の記録を調べると、適用態が稀であるという印象は受けない（奥田 1991-95: II, III, IV を参照）。

㉚　実際には、逆受動化は適用態のちょうど反対の操作である。逆受動は目的語を削除するのに対し、適用態は目的語を追加する。

㉛　これに似た派生として、カバルド語の sociative がある（Kazenin 2007）。

㉜　接尾辞 ***-ke*** は結合価を減らすためにも増やすためにも用いられる（4.4.1.2 節を参照）。これに似た現象は、ツングース語族や朝鮮語（Nedjalkov, I.V. 1991: 29）など、他の言語でも報告されている。

㉝　*kampi cipetpap ekamuynomi*「破れ紙つきの神を崇める」とは、和人の神道の儀礼で用いられる「御幣」を指した表現。和人とアイヌ人が神を崇める方法が対照されている。アイヌ人にとっては、イナウ（木幣）と「トノト」と呼ばれるお酒を用いるのが、あらゆる動物を含むカムイを讃える唯一の正しい方法であった。そして、正しい方法で殺され崇められたときのみ、カムイは贈りものの肉と皮を持ってよみがえり、人間のところに戻ってくると信じられていた。

㉞　助動詞として再分析されたという証拠は、北海道のほかの方言に見られる。たとえば、推測的な証拠性を表す石狩方言（SK: 29；北海道北東部方言、中央）の ***ru-ne***（おそらくアクセントを持たない）では、「名詞」の文法化がさらに進んで音声的な実体を部分的に失い、コピュラはアクセントを失ったと推定される（千歳方言の ***ruwe né***（奥田統己、私信）と対比）。同じ現象は北海道南部方言でも観察される。助動詞の一部で、本来は名詞／名詞化詞であったと考えられるが、もはや独立で名詞として用いられないものについては、もとの意味はもはや推測するしかない。たとえば、佐藤（2008: 26）が助動詞として分析する ***kus-ne***「つもりだ」（< ***kusu***「意図（？）」＋***ne*** < コピュラ >）。

㉟　疑問詞については方言間の差異が大きい。沙流方言と千歳方言のあいだでさえ部分的な違いがある。Bugaeva（2004: 87）を参照。

* Emma Geniušienė 氏からは再帰について、長崎郁氏からは日本語の音韻論について、Peter Hook 氏からは pair verb について貴重な助言を受けた。また、英語版の編者 Nicolas Tranter 先生と日本語版の編者河須崎英之氏の入念なお仕事に感謝する。筆者が教えを受けた故 Vladimir Nedjalkov 先生（1928–2009）、佐藤知己先生、中川裕先生とアイヌ語のコンサルタントであった故小田イト氏（1908–2000）には心からの深い感謝を表する。上記の研究者は、必ずしも本稿における筆者の見解を共有するわけではなく、いかなる誤りの責を負うものでもない。

出典

AB　Bugaeva, Anna（2004）

B　Batchelor, John（1889［1938, 1995］）

H　服部四郎 編（1964）
K　Nakagawa Hiroshi & Anna Bugaeva (forthcoming) *A web-accessible corpus of folktales of the Saru dialect of Ainu by Mrs. Kimi Kimura (1900-1988)*. ELDP, SOAS, University of London. (http://elar.soas.ac.uk/deposit/0107).
K7803232UP.035 のようなデータ番号は、採録年（(19）78)、月（03)、日（23)、その日に録音したテープの番号（2)、ジャンル（UP はウエペケレを表す)、文番号（035)、のような情報から構成される。
KI　久保寺逸彦（1977）
KI1　久保寺逸彦 編（1992）『アイヌ語・日本語辞典稿―久保寺逸彦アイヌ語収録ノート調査報告書』．札幌：北海道教育委員会.
KS　Bugaeva, Anna & Endō Shiho (eds.), Kurokawa Setsu (speaker) & Nathan, David (multimedia developer) (2010)
N　中川裕（1995）
NN　中川裕，中本ムツ子（1997）
NV　Nevskij, Nikolaj (1972)
O4　奥田統己（1994）
OI　小田イト（1908-2000)，アイヌ語千歳方言の話者 , 筆者のフィールドノートより.
SK　砂沢クラ（1983）『私の一代の思い出：クスクップオルシペ』．札幌：みやま書房.
ST　佐藤知己（1992）「「抱合」から見た北方の諸言語」．宮岡伯人 編『北の言語：類型と歴史』193-201 頁．東京：三省堂.
ST1　佐藤知己（2008）
ST2　佐藤知己（1997）「蛇呑み女」 渡辺仁，大島稔，切替英雄，佐藤知己 編『アイヌ民族文化財調査報告書』17，44-46 頁．札幌：北海道教育委員会.
T　田村すず子（1996）
T1　田村すず子（1984）
T2　田村すず子（1988）
T3　田村すず子（1984）『アイヌ語資料（1)』東京：早稲田大学語学教育研究所.
T4　田村すず子（2001［1972a］）

参照文献

『アイヌ語考　文法 I-II』東京：ゆまに書房.
アイヌ民族博物館　編（2009［1993］）『アイヌ文化の基礎知識』東京：草風館.
浅井亨（1969）「アイヌ語の文法―アイヌ語石狩方言の概略」『アイヌ民族誌』1，768-799 頁．東京：第一出版.
魚井一由　訳（1991）『アイヌフォークロア』札幌：北海道出版企画センター（Nevskij, Nikolaj（1972）*Ajnskij Folklor*［Ainu folklore］．Moscow: Nauka）
奥田統己（2001［1989］）「日本語とアイヌ語における連体修飾うと文の名詞化」『早稲田大学語学教育研究所紀要』39．（再録：『アイヌ語考　文法 II』第 5 巻，243-256 頁．東京：ゆまに書房.）
奥田統己（1991-95）『静内方言の伝承　織田ステノの口承文芸 1-5』静内：静内町教育委員会.
片山龍峯（2003）『「アイヌ神謡集」を読みとく』（Julie Kaizawa による英訳付き）東京：草風館.
萱野茂（1996）『萱野茂のアイヌ語辞典』東京：三省堂.
萱野茂（1998）『萱野茂のアイヌ神話集成』1-10 巻，東京：平凡社.
萱野茂（2005［1974］）『ウエペケレ集大成』（CD 付き）．東京：日本伝統文化振興財団.
金成マツ，金田一京助（1993［1959-75］）『アイヌ叙事詩ユーカラ集』1-9 巻．東京：三省堂.
切替英雄（1996）「アイヌ語十勝方言による昔話『島を引いて泳ぐオタスの少年の物語』の辞典と文法」『学園論集』123-286 頁．北海学園大学学術研究会.
切替英雄（2003）『アイヌ神謡集辞典　テキスト、文法解説付き』．東京：大学書林.
金田一京助　編（1972）上原熊次郎著「もしほ草」『アイヌ語資料叢書』東京：国書刊行会.
金田一京助（1993［1931］）「アイヌユーカラ語法摘要」『アイヌ叙事詩ユーカラの研究 2』3–233 頁，東京：東洋文庫．（再版：1993：「アイヌ語学講義 2」『金田一京助全集　アイヌ語 I』第 5 巻，145–366 頁．東京：三省堂.
久保寺逸彦（1977）『アイヌ叙事詩神謡・聖伝の研究』．東京：岩波書店.
佐藤知己（1995）「アイヌ語の受動文に関する一考察」『北大文学部紀要』44-1, 1-18 頁．札幌：北海道大学.
佐藤知己（1995-98）「鳥に恩返しをされた湧別のイクレスイェの話」ほかの上田トシによる民話．渡辺仁，大島稔，切替英雄，佐藤知己　編『アイヌ民族文化財調査報告書』15-18．札幌：北海道教育委員会.
佐藤知己（2004）「アイヌ文学における一人称体の問題」『北大文学研究科紀要』112，171–185 頁．札幌：北海道大学.
佐藤知己（2006）「アイヌ語千歳方言のアスペクト *-kor an*, *wa an* を中心として」『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』12，43–67 頁．札幌：北海道立アイヌ民族研究センター.
佐藤知己（2007a）「アイヌ語千歳方言の再帰接頭辞」『認知科学研究』5, 31-39 頁．室蘭：室蘭認知科学研究会.
佐藤知己（2007b）「再びアイヌ語千歳方言のアスペクトについて―とくに完了を表す形式をめぐって」『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』13，1-14 頁．札幌：北海道立アイヌ民族文化ん研究センター.
佐藤知己（2008）『アイヌ語文法の基礎』東京：大学書林.
四宅ヤエの伝承刊行会　編（2007）『冨水慶一採録　新宅ヤエの伝承　歌謡，散文』釧路：四宅ヤエの伝承刊行会.
四宅ヤエの伝承刊行会　編（2011）『冨水慶一採録　新宅ヤエの伝承　散文 1』釧路：四宅ヤエの伝承刊行会.

砂沢クラ（1983）『私の一代の思い出　クスクップオプシベ』札幌：みやま書房.
田村すず子（1979）『アイヌ イタク　アイヌ語入門』（語研教材選書 21）．東京：早稲田大学語学教育研究所.
田村すず子（1983a）『アイヌ語基礎語彙』（語研教材選書 31）．東京：早稲田大学語学教育研究所.
田村すず子（1984）『アイヌ イタク　アイヌ語入門　解説』（語研教材選書 32）．東京：早稲田大学語学教育研究所.
田村すず子（1984-2000）『アイヌ語資料』1-12．東京：早稲田大学語学教育研究所.
田村すず子（1988）「アイヌ語」亀井孝，河野六郎，千野栄一編『言語学大辞典』東京：三省堂．（英訳：Tamura, Suzuko（2000）*The Ainu Language*（ICHEL Linguistic Studies 29）Tokyo: Sanseidō.）
田村すず子（1996）『アイヌ語沙流方言辞典』東京：草風館.
田村すず子（2001［1964］）「アイヌ語沙流方言の名詞（その 1）」『早稲田大学語学教育研究所紀要』3（再録：『アイヌ語考　文法 I』第 4 巻，107-133 頁．東京：ゆまに書房.）
田村すず子（2001［1966］）「アイヌ語沙流方言の名詞（その 2）：所属形の形成」『早稲田大学語学教育研究所紀要』3（再録：『アイヌ語考　文法 I』第 4 巻，134-154 頁．東京：ゆまに書房.）
田村すず子（2001［1972a］）「アイヌ語沙流方言の人称の種類」『言語研究』61: 17–39 頁．（再録：『アイヌ語考　文法 I』第 4 巻，370-392 頁．東京：ゆまに書房.）
田村すず子（2001［1972b］）「アイヌ語沙流方言に見られる重複法」『アジア・アフリカ文法研究』1（再録：『アイヌ語考　文法 I』第 4 巻，357-369 頁．東京：ゆまに書房.）
田村すず子（2001［1973］）「アイヌ語沙流方言の合成動詞の構造」『アジア・アフリカ文法研究』2（再録：『アイヌ語考　文法 I』第 4 巻，407-428 頁．東京：ゆまに書房.）
田村すず子（2001［1977］）「アイヌ語沙流方言の命令表現」『アジア・アフリカ文法研究』5（再録：『アイヌ語考　文法 II』第 5 巻，22-141 頁．東京：ゆまに書房.）
田村すず子（2001［1978］）「アイヌ語沙流方言の疑問表現」『アジア・アフリカ文法研究』6（再録：『アイヌ語考　文法 I』第 4 巻，142-154 頁．東京：ゆまに書房.）
田村すず子（2001［1982］）「アイヌ語沙流方言における上下を表す位置名詞」『言語研究』82（再録：『アイヌ語考　文法 I』第 4 巻，155-182 頁．東京：ゆまに書房.）
田村すず子（2001［1993］）「アイヌ語沙流方言における「中」を表す 3 つの名詞：*or*, *onnay*, *tum*」『早稲田大学語学教育研究所 30 周年論文集』（再録：『アイヌ語考　文法 I』第 4 巻，269-292 頁．東京：ゆまに書房.）
知里真志保（1974［1936］）．「アイヌ語法概説」．『知里真志保著作集』第 4 巻，3–197 頁．東京：平凡社.
知里真志保（1973［1942］）「アイヌ語法研究―樺太方言の中心として」．『知里真志保著作集』第 3 巻，455–586 頁．東京：平凡社.
知里真志保（1975，1976［1953，1954，1962］）『分類アイヌ語事典』1-3 巻．（東京：平凡社より再刊）
知里真志保（1981［1937］）『アイヌ民譚集』．東京：岩波文庫.
知里幸恵（1978［1923］）『アイヌ神謡集』．東京：岩波文庫.
角田太作（1996）「体言締め文」鈴木泰，角田太作　編『日本語文法の諸問題：高橋太郎先生古稀記念論文集』139-161 頁．ひつじ書房.
寺村秀夫（1992）「連体修飾のシンタクスと意味（その 1）」『寺村秀夫論文集 I 日本語文法編』157-207 頁．東京：くろしお出版.
中川裕（1981）「アスペクト的観点から見たアイヌ語動詞」『言語学演習’81』141–155 頁．東京：東京大学.
中川裕（2001［1984］）「アイヌ語の名詞と場所表現」『言語学論集’84』．東京：東京大学．（再録：『アイヌ語考　文法 II』第 5 巻，211–229 頁．東京：ゆまに書房.）
中川裕（1988）「アイヌ語千歳方言の人称代名詞とその歴史的位置」『東京大学言語学論集　’88』239-253 頁．東京：東京大学文学部言語学研究室.
中川裕（1995）『アイヌ語千歳方言辞典』東京：草風館.
中川裕（1997）『アイヌ昔話の世界』東京：平凡社.
中川裕（2000-11）「アイヌ語口承文芸テキスト集 1-11」『ユーラシア言語文化論集』3-13．千葉：千葉大学.
中川裕（2007）『カムイユーカラでアイヌ語を学ぶ』東京：白水社.
中川裕（2009）「アイヌ語の接頭辞度」．津曲敏郎　編『サハリンの言語の世界』63-70 頁．札幌：北海道大学大学院文学研究科.
中川裕・中本ムツ子（1997）『エクスプレス アイヌ語』東京：白水社.
服部四郎（1959）『日本語の系統』東京：岩波書店.
服部四郎　編（1964）『アイヌ語方言辞典』東京：岩波書店.
ブガエワ，アンナ（2007）「アイヌ語鵡川方言テキスト―新井田セイノさんの神謡」津曲敏郎　編『環北太平洋の言語』第 14 号，65-85 頁．札幌：北海道大学.
福田（田村）すず子（1955）「アイヌ語の動詞の構造」『言語研究』30: 46-64 頁.
福田（田村）すず子（2001［1960］）「アイヌ語沙流方言の助動詞」『民俗学研究』24-4．67-78 頁．（採録：『アイヌ語考　文法 I』第 4 巻，370-392 頁，東京：ゆまに書房.）
北海道ウタリ協会　編（1994）『アコロ　イタク』札幌：クルーズ.
村崎恭子（1976）『樺太アイヌ語』東京：国書刊行会.
村崎恭子（1979）『樺太アイヌ語　文法編』．東京：国書刊行会.
村崎恭子（2001）『浅井タケ口述サハリンアイヌの昔話』．東京：草風館.

村崎恭子（2009）『樺太アイヌ語入門 会話』. 釧路：緑鯨社.
村山七郎（1992）『アイヌ語の起源』東京：三一書房.
村山七郎（1993）『アイヌ語の研究』東京：三一書房.
明治前日本科学史刊行会　編（1971）『明治前日本人類学・先史学史』東京：日本学術振興会.

Alpatov, Vladimir M., Bugaeva, Anna & Nedjalkov, Vladimir P. (2007) 'Reciprocals and sociatives in Ainu,' in Nedjalkov, Vladimir P. (ed.) *Reciprocal constructions*. (Typological Studies in Language 71) , pp. 1751–1822. Amsterdam, Philadelphia: John Benjamins.

Asai Tooru (1974) 'Classification of dialects: cluster analysis of Ainu dialects,' in *Bulletin of the Institute for the Study of North Eurasian Cultures* 8, pp. 45-136. Sapporo: Hokkaidō University.

Austerlitz, Robert (1976) 'L'appelation du renne en japonais, aïnou et surtout en ghiliak,' in Walter Heissig et al. *Tractata Altaica: Denis Sinor, sexagenario optime de rebus Altaicis merito dedicata*, pp. 45-49. Wiesbaden: Harrassowitz.

Baker, Mark (1988) *Incorporation: A theory of grammatical function changing.* Chicago: University of Chicago Press.

Batchelor, John (1889 [1938, 1995]) *An Ainu-English-Japanese dictionary.* Tokyo: Iwanami Shoten.

Bugaeva, Anna (2004) *Grammar and folklore texts of the Chitose dialect of Ainu (Idiolect of Ito Oda).* ELPR (Endangered Languages of the Pacific Rim) Publications Series A-045. Suita: Osaka Gakuin University.

Bugaeva, Anna (2008a) 'Reported discourse and logophoricity in Southern Hokkaido dialects of Ainu', *Gengo Kenkyū* 133. 31-75.

Bugaeva, Anna (2008b) 'Speech report constructions in Ainu', in Vajda, Edward J. (ed.) *Subordination and coordination strategies in North Asian languages.* (Current Issues in Linguistic Theory 300), pp. 17-29. Amsterdam & Philadelphia: John Benjamins.

Bugaeva, Anna (2008c) 'Ainu causatives' in *Nihon Gengogakkai Yokōshū* [Proceedings of Linguistic Society of Japan], n. 136. 420-426.

Bugaeva, Anna (2010a) 'Ainu applicatives in typological perspective', *Studies in Language* 34 (4). 749-801.

Bugaeva, Anna (2010b) 'Anticausative/causative verb alternation in Ainu,' paper presented at *Societas Linguistica Europaea (SLE), 43rd Annual Meeting*, Vilnius University, Lithuania, September 2, 2010.

Bugaeva, Anna (2011a) 'A diachronic study of the impersonal passive in Ainu,' In: Malchukov, Andrej & Anna Siewierska (eds.) *Impersonal constructions cross-linguistically* (Studies in Language Companion Series 124), pp. 517-546. Amsterdam & Philadelphia: John Benjamins.

Bugaeva, Anna (2011b) 'Ditransitive constructions in Ainu', *Sprachtypologie und Universalienforschung (STUF)* 64 (3). 237-255.

Bugaeva, Anna (forthcoming a) 'Causative constructions in Ainu', in Kulikov, Leonid & Serzants, Ilja (eds.) *Transitivity and voice in Indo-European and beyond: A diachronic typological perspective*, Amsterdam, Philadelphia: John Benjamins.

Bugaeva, Anna (forthcoming b) 'Valency classes in Ainu', in Comrie, Bernard & Malchukov, Andrej (eds.) *Valency classes cross-linguistically*, Berlin, New York: Mouton de Gruyter.

Bugaeva, Anna (forthcoming c) 'Ainu valency classes database', in Hartmann, Iren, Haspelmath, Martin & Taylor, Bradley (eds.) *Valency classes across languages.* Munich: Max Planck Digital Library. Available online at http://www.valpal.info/

Bugaeva, Anna & Endō Shiho (eds.) (2010) Kurokawa Setsu (speaker) & Nathan, David (multimedia developer) . *A Talking dictionary of Ainu: A new version of Kanazawa's Ainu conversational dictionary.* ELDP, SOAS, University of London. http://lah.soas.ac.uk/projects/ainu/

Bugaeva, Anna & Matsumoto Yoshiko (2009) 'Noun-modifying constructions in Ainu,' paper presented at *the 1st meeting of the PFIH — NMC project* headed by Matsumoto Yoshiko, Stanford University, USA, July 28, 2009.

Chamberlain, Basil Hall (1887) *Aino fairy tales* (n.1, 2) . Tokyo: Kobunsha.

Dixon, Robert M. (2000) 'A typology of causatives: form, syntax and meaning', in Dixon, Robert M. W. & Aikhenvald, Alexandra Y. (eds.) *Changing valency. Case studies in transitivity*, pp. 1-29. Cambridge: CUP.

Dixon, Robert M. W. 2010. *Basic linguistic theory.* v. 2. Oxford: OUP.

Dixon, Robert M. W. & Aikhenvald, Alexandra (1997) 'A typology of argument-determined constructions', in Bybee, Joan, Haiman, John & Thompson, Sandra A. (eds.) *Essays on Language Function and Language Type*, pp. 1-113. Amsterdam, Philadelphia: John Benjamins.

Dixon, Robert M. W. & Aikhenvald (2000) 'Introduction' in Dixon, Robert M. W. & Aikhenvald, Alexandra Y. (eds.) *Changing valency. Case studies in transitivity*, 30-89. Cambridge: CUP.

Dobrotvorskij, Mikhail (1875) *Ainsko-russkij slovar*' [An Ainu-Russian dictionary]. Kazan': Kazan' University Press.

Fitzhugh, William W. & Dubreuil, Chisato O. (eds.) (1999) *Ainu. Spirit of a Northern People*. Washington: Arctic Studies Center. National Museum of Natural History Smithsonian Institution in Association with University of Washington Press.

Frajzyngier, Zygmunt (1995) 'A functional theory of complementizers', in Bybee, Joan & Fleischman, Susanne (eds.) *Modality in grammar and discourse*, pp. 473–502. Amsterdam: John Benjamins.

Geniušienė, Emma (1987) *The typology of reflexives*. Berlin, New York, Amsterdam: Mouton de Gruyter.

Givon, Talmy. 1983. *Topic continuity in discourse: A quantitative cross-language study* (Typological Studies in Language 3). Amsterdam, Philadelphia: John Benjamins.

Gjerdman, Olof (1926) 'Word-parallels between Ainu and other languages', in *Le Monde Orientale*, vol. 20, facs. 1-3, pp. 29-84. Uppsala.

Heine, Bernd & Kuteva, Tania (2007) *The genesis of grammar. A reconstruction.* Oxford: OUP.

Hopper, Paul & Thompson, Sandra A. (1980) Transitivity in grammar and discourse. *Language* 56. 251-299.

ICHL20 International Symposium 'Historical linguistics in the Asia-Pacific region and the position of Japanese', National Museum of Ethnology, Osaka, July 30, 2011.

Kazenin, Konstantin (2007) 'Reciprocals, comitatives, sociatives, and reflexives in Kabardian,' in Nedjalkov, Vladimir P. (ed.) *Reciprocal constructions*. (Typological Studies in Language 71) , pp. 739-772. Amsterdam, Philadelphia: John Benjamins.

Keenan, Edward L. & Comrie, Bernard (1977) 'Noun phrase accessibility and universal Grammar', *Linguistic Inquiry* 8. 63-99.

Kirikae, Hideo (1994: 316) 'Some aspects of reflexivity in Ainu', in Shibatani, Masayoshi (ed.) *A comprehensive study of the function and typology of language*, pp. 310-317. Kobe: Kōbe University.

Lindquist, Ivar (1960) 'Indo-European features in the Ainu language. With reference to the thesis of Pierre Naert', in *LUA*, 54, 1. 3-67.

Malchukov, Andrej (2005) 'Case pattern splits, verb types and construction competition', in Amberber, Mengistu & de Hoop, Helen (eds.) *Competition and variation in Natural languages: The case for case*, pp. 73-117. Amsterdam & Tokyo : Elsevier.

Malchukov, Andrej, Martin Haspelmath & Bernard Comrie. 2010. 'Ditransitive constructions: A typological overview', in Malchukov, Andrej, Haspelmath, Martin & Comrie, Bernard (eds.) *Studies in ditransitive constructions: A comparative handbook*, pp. 1–67. Berlin, New York: Mouton de Gruyter.

Matsumoto Yoshiko (1997) Noun-modifying constructions in Japanese: a frame-semantic approach (Studies in language companion series 35) . Amsterdam, Philadelphia: John Benjamins.

Mithun, Marianne (1984) The evolution of noun incorporation. *Language* 60. 847–894.

Munro, Neil G. (1962) *Ainu creed and cult.* London: Routledge & Kegan Paul.

Naert, Pierre (1958) 'La situation linguistiue de l'Ainou et Indoeuropeen', in: *LUA*, 53, 4. 1-234.

Nakagawa Hiroshi & Anna Bugaeva (forthcoming) *A web-accesible corpus of folktales of the Saru dialect of Ainu by Mrs. Kimi Kimura (1900–1988).* ELDP, SOAS, University of London. http://elar.soas.ac.uk/deposit/0107

Nedjalkov, Igor V. (1991) 'Recessive-accessive polysemy of verbal suffixes', *Languages of the World* 1. 4-32.

Nedjalkov, Vladimir P. & Silnitskij, Georgij G. (1969). 'Tipologija morfologicheskogo i leksicheskogo kauzativov [Typology of morphological and lexical causatives]', in Xolodovich, Alexander A. (ed.) *Tipologija Kauzativnykh Konstruktsij. Morfologicheskij Kauzativ.* Leningrad: Nauka.

Nevskij, Nikolaj (1972) *Ajnskij Folklor* [Ainu folklore]. Moscow: Nauka.（魚井一由　訳（1991）『アイヌフォークロア』札幌：北海道出版企画センター.）

Patrie, James (1982) *The genetic relationship of the Ainu language* (Oceanic Linguistics. Special Publications 17). The Univeristy of Hawaii.

Payne, Thomas (2006) *Exploring Language Structure*. Cambridge: CUP.

Perlmutter, David M. (1978) 'Impersonal passives and the unaccusative hypothesis', in *Proceedings of the fourth annual meeting of the Berkeley linguistics Society*, pp. 157–89. Berkeley: Berkeley Linguistics Society, University of California.

Peterson, David A. 1999. *Discourse-functional, historical, and typological aspects of applicative constructions*, PhD diss, Berkeley University.

Peterson, David A. 2007. *Applicative Constructions.* Oxford: OUP.

Pilsudski, B. (1912) *Materials for the Study of Ainu Language and folklore*. Imperial Academy of Sciences: Cracow. Reprinted in: Majewicz, Alfred F. (ed) (1998) *The Collected Works of Bronislaw Pilsudski*, v. 1. Mouton de Gruyter.

Refsing, Kirsten (ed.) (1986) *The Ainu language. The morphology and syntax of the Shizunai dialect*, Aarhus: Aarhus University Press.

Refsing, Kirsten (ed.) (1996) *Early European writings on the Ainu language*, 10 vol. Richmond: Curzon.

Refsing, Kirsten (ed.) (1998) *Origins of the Ainu language: the Ainu Indo-European controversy,* 5 vol. Richmond: Curzon.

Satō Tomomi (1997) 'Possessive expressions in Ainu', in Hayashi Tōru & Bhaskararao, Peri (eds.) *Studies in Possessive Expressions*, pp. 143-160. Tokyo: Tokyo University of Foreign Studies.

Satō Tomomi (2003) 'Phonological status of the epenthetic glides in the Chitose dialect of Ainu', in *Hokkaidō-ritsu ainu minzoku bunka kenkyū sentā kenkyū kiyō* 9, pp. 11-34. Sapporo: Hokkaidō-ritsu ainu minzoku bunka kenkyū sentā.

Shibatani Masayoshi (1990) *The languages of Japan*. Cambridge: CUP.

Song, Jae Jung (2001) *Causatives and causation: a universal-typological perspective.* London: Longman.

Spencer, Andrew (1991) *Morphological theory*. Oxford, U.K., Cambridge, Mass.: Blackwell.

Steever, Sanford B. (1988) *The serial verb formation in the Dravidian languages.* Delhi: Motilal Banarsidass.

Strong, Sarah (2011) *Ainu spirits singing: The living world of Chiri Yukie's Ainu Shin'yōshū.* Honolulu: University of Hawai'i Press.

Tamura, Suzuko (1970) 'Personal affixes in the Saru dialect of Ainu', in Jakobson, Roman and S. Kawamoto (eds.) . *Studies in general and oriental linguistics*, presented to Hattori Shirō, pp. 577-611. Tokyo: TEC Company Ltd.

Tamura, Suzuko (1983b) 'Syntactic patterns of position nouns in Japanese, Ainu, Canadian Eskimo and Basque', in *IKER-2: Piarres Lafitteri Omenaldia*, Bilbao: Euskalzaindia.

Tamura, Suzuko (2000) *The Ainu Language* (ICHEL Linguistic Studies 29) Tokyo: Sanseidō.

Torii Ryūzō (1903) *Les Aïnou des Iles Kouriles.* In the series: Etudes Archaeologiques Ethnologiques, Tokyo University.

Tsunoda Tasaku (1985) 'Remarks on transitivity', *Journal of linguistics* 21. 385-396.

Tsunoda Tasaku (forthcoming) ‘Mermaid construction in Japanese’, in Tsunoda Tasaku (ed.) *Mermaid constructions cross-linguistically* (Typological Studies in Language), Amsterdam, Philadelphia: John Benjamins.
Vovin, Alexander (1993) *A reconstruction of Proto-Ainu.* Leiden, New York, Köln: E.J. Brill.